



この歌手を覚えている方は、もうきわめて少なくなっているだろう。かなりリサーチしたが、詳しいプロフィールはついに得られなかった。当時はたまにテレビなどで見かけたし、調べてみて驚いたが、映画にも出ている。活動は1970年前後から1990年前後、であったろうか。亡くなったとき、いくつかのスポーツ紙などのサブ・メディアがごく小さく、ほぼ事務的に報じたが、反応はほとんどなく、それだけで終わった。これと言ったヒット曲もなく、私の覚えているのも、わづかにこの曲のみである。けれど、この曲は昭和歌謡として、きわめていいセンをいっている。いまのテレビ東京の、夜の歌番組で2、3度みたのだが、中年（40才前後？に見えた。）ではあるが、高級クラブのママのような着物姿の彼女は、凜として美しく、ほどよい色気を含んだ甘くソフトな美声（伍代夏子に近い声質）で、この曲を唄った。ネットで販売されている、昔のレコードのジャケットの金沢も、なかなか美しい。

（浮気な人ね 憎いひと いつもわたしを 困らせるのね 浮気なひとね 憎いひと そのひとは 綺麗なの この私より 素敵なのね-----）

*同名の、モダンダンス舞踏家の金沢景子さんは、まったく別人です。

*この曲は、金沢の晩年の作品。この曲のリメイクは、声質やキャラからいって、伍代夏子、藤あや子、長保育紀などが適している。アレンジに、モダンさと、深みを付けることが課題であろう。

*出演した映画

「藤 猛物語 ヤマト魂」（創映プロ＝日活）

監督／関川秀雄 音楽／宮下茂

出演／藤猛、高城丈二、荻田マイク、山本陽子、金沢景子、他

*当時の世界ジュニアウェルター級チャンピオンの藤 猛の半生を元にした作品。アメリカ海兵隊あがりの日系人・ポールことタケシ藤井〔後に藤 猛と改名〕に助けられたギター弾きで実は試合中に失明した元ボクサー・吉岡竜美（高城丈二）、そして二人を慕う少年ジロー（荻田マイク）を中心に話が進む。力道山の開いたリキジムに所属した藤 猛が次々と強敵を倒し、世界チャンプ・ロポポロを破ってチャンピオンベルトを手にするまでを描く。

*演歌一本勝負「涙の艶歌節」田端義夫 笹みどり 井沢八郎 金沢景子 愛川まこと。

*昭和流行歌・金沢景子「恋の銀座」。つけまつげ濃厚のディーパ。他の出演者は、泉アキ、都はるみ、矢吹建、金沢景子、加賀城みゆき、宮尾たかし、Jシャングリラ等。

（収集プロフィール）

金沢 景子（1945～1983. 9.12）1970～1980前後に活動した、演歌歌手。東芝レコード？推定であるが、石川県近辺・民謡出身かと思われる。活動時は、地方回りが主だったようだが、マスメディアにも、たまに登場した。晩年、癌との闘病による数年の休業→活動再開の経緯。1983年に、38才で病死。

*（人生の応援詩・金沢発より）

『金沢加賀人形』昭和58年 （詞・曲・歌唱：金沢 景子）

しと しと しと 雨が降る 香林坊の 街灯りにも あの女何処か 淋しそう
蛇の目の傘 涙の雨 犀川に 流しておゆき 金沢-----

2年程前に、取り上げようとリサーチしたのだが、キチンとしたメディアからは、なぜかほとんど情報が得られない。やっと見つけた、ある方のブログによると、桂は、歌手としてのデビュー以前に、子役としてかなりの映画・舞台に出演していた、という。また、ある古書販売サイトでは、天才少年浪曲師として、評判だったとか。また、昭和50年頃の、京都のとあるスナックで、桂から3、4回、歌唱指導をしてもらった、という方もいた。どれも未確認なので、参考程度にしかならないが。長く謎だった、消息が急に途切れたような終り方の歌手。ジャケ写真は背広姿で、ヤセ気味、容姿はやっと2枚目半といったところ。今回、再トライして、依然詳しいデータはないまでも、多少その経緯がつかめてきた。其れによると、当初大いに期待され、かなりの売り出しをして貰ったのだが、ある日失踪（女性がらみのようだ）して、仕事に穴を開けてしまったとの事。その後、いちどは復帰できて、しばらく活動したようだが、またまたある日失踪してしまう。このような事情で、業界から見放されてしまったようだ。歌手としての活動は、足掛けわづか5年たらず？現在の消息は、私のサーチ範囲には、残念ながら無い。まあ、これだけ唄がうたえる人なのだから、どこかで店でもやっているのかも知れないが。ユーチューブ等に7曲前後アップされ、根強いファンも多い。けれど、この経緯では、プロに戻ることは難しいだろう。私の年齢から言って、テレビで何度か見たことはあるはずなのだが、なぜか記憶に浮かばない。ハスキーな低音から、五木ひろしのような高音までを自在に駆使して、変なクセをつけずに、素直に直球で歌い上げる。現在の歌手にないテイストとテクニックがあり、とても惜しい方である。

「心のきず」

夜にまぎれて 船が出る 傷をかくした---意地で身をひく 馬鹿も乗る 北の海峡 ひゆるひゆると 風が泣き泣き 別れ唄

(収集プロフィール)

桂 五郎(かつら ごろう、194X~?) 1977年にデビューした歌手。データ不足のため、詳細は不明。

*「再失踪」あまりにマイナーな、それに大して知らないんです。やはり女性がらみでしたよね？芸名が、歴史上の「桂小五郎」をモジっていたのと、奥二重の目元、ペツタリしていた髪型が何となく頭の中に浮かぶ。

*「心のきず」「北から南から」の2枚。結構キツクでフツユされてて、歌謡大賞新人祭りも唯一の男性演歌で当選。でその1回目が新人賞レースの本番の秋、新宿音楽祭出場を目前に控えての失踪で、この時は随分芸能週刊誌で報道された。2回目のキャッツアイと同じ時は、もう見放されたのか報道は全くされませんでしたね。

*桂五郎は、平凡・明星の記事とか、歌本で目にしたのは憶えているんですけど、歌っているお姿、ましてや歌のタイトルなど全く知識がない。

主な曲

心のきず (阿久悠作詞 三木たかし作曲：数年前に、香田晋・カバー)

命をかけて

北から南から （阿久悠作詞・三木たかし作曲：島津ゆたか・カバー）

それも夢だった

ふたり

明日は明日の風が吹く

一般的には、ほとんど知られていないようだ。私も、昭和38年前後に、白黒テレビで2、3度、あとラジオや商店街から、たまに流れて来た、この曲しか覚えがないが。演歌調の歌謡曲だけど、インパクトが強いのは、高木の歌唱がどこか口カビリーがかっているからだろう。確か、白黒テレビでも、硬い表情のまま司会者とトークし、唄い終り去るまで、一度も笑顔を見せなかった記憶がある。この曲は、かなりヒットしたと思うが、いつの間にか、マスメディアから、消えていった歌手である。理由は、よく分からないが。

現況を、かなり調べてみたが、ある程度のことしか、把握できなかった。知らなかったが、高木は、ほかに「エレキ歌謡」なるジャンルで、いくつかのヒットを残したようだ。

「この街を出てゆこう」（詞 西沢爽 曲 粕林正一）

この街を出てゆこう 出てゆこう 街にいったなら あの子のことを 思い出すのが 辛いから
俺は別れて-----俺はひとりに なりたいよ

（プロフィール）

高木たかしは（たかぎ たかし、1949～ ）大阪出身の歌手。芝居の子役で活動したあと、13歳で歌手デビュー。清野太郎のバンドに所属していたこともある。

*昭和30年代後半の青春歌謡あたりで「この街を出ていこう」や「ちぎれ雲」をうたった高木たかし。そのあとエレキブームに乗って「東京・ア・ゴーゴー」をスパイダースとともにうたっていました。やがて霧の彼方へ。

*テレビで見た記憶を頼ると細身で、ほとんど笑わないようなクールな感じ。音源は幾つか残っているけど、映像はないだろう、紅白も出てないし。

（Picture on the Wallより）

代表曲

この街を出てゆこう（昭和37年）詞：西沢爽 曲：粕林正一

スキスキスキと50回（昭和38年）詞：西沢爽 曲：粕林正一

十代の青春 （昭和38年）詞：三浦康照 曲：市川昭介

ちぎれ雲

母にも云えず

涙の草笛

東京の夕焼け

きれいな人の白い指

東京・ア・ゴーゴー（バック演奏、田辺昭知とザ・スパイダース 昭和41）

涙のドラム

*「エレキ歌謡」とは：60年代のエレキ・ブームの中で誕生したエレキ・サウンドと歌謡曲とのミスマッチ。昭和エレキ歌謡の当時を代表するヒット曲の数々から、80年代に誕生した「ネオ・エレキ歌謡」作品。ここ数年再び注目されている昭和歌謡の中でも、ロック世代にも親しみやすい「エレキ歌謡」の魅力を楽しめる作品。

関連情報（未確認ですので、ご参考に）

◎高木たかし&カントリーチルドレン

カントリー&ウェスタンの名曲を演奏し、その歌唱とバンドのリズム感には独特な味わいがあるとの評価。また、旅先で作ったカントリー調のオリジナル曲や、希望によっては、なつかしい唱歌を演奏して観客とともに歌う、歌声喫茶タイムをもつくり、充実感溢れるステージを提供。

*カントリーを中心にライブ活動30年以上のキャリアを持ち、静岡ケントスでも、もちろん毎度盛り上げてくれます。

*FMしみず・に出ている(2007頃)同名の方がいるが。写真に面影はある気がするが、不確定。

*「ちぎれ雲」 高木の、もうひとつの名曲です。

ちぎれたあの雲 見るたびに思うよ 君とぼくと摘んだ小さなスマレの花
愛らしいえくぼと 白いスマレの花 胸にやきついてる 過ぎた日の思い出よ
ちぎれたあの雲 飛んでゆく、その日は 君の澄んだ瞳、長くて黒いまつげ
思い出し、一人で 丘の道を登り、雲に向かい叫ぶ「君だけが好きだよ」と

◎「昭和裏歌謡大全集」とも言うべきセットが、発売された。中身について説明したいが、できない。確かに値段は高いが、聴き終わったあと、半ば放心状態となり、すごいと拍手したくなる、そんなエネルギーを放つ楽曲がはちきれんばかりに。

「青春の大ヒット大全集」ムニバス(2007・発売)

悲しきエレキ小僧／飯田久彦

恋のGT／西郷輝彦

モンキー大学／飯田久彦

回転禁止の青春さ／美樹克彦

東京・ア・ゴーゴー／高木たかし

青春・ア・ゴーゴー／田辺昭知とザ・スパイダース

青春がギラギラ／松平マリ子

チークチーク／松平マリ子

恋の台風第一号／美樹克彦

学級委員／水沢有美

太陽と遊ぼう／青山ミチ

君を信じて／水戸浩二

ほか

淡路まさみ

ほとんどヒットはしなかったが、隠れた名曲のひとつである。夜のヒットスタジオなどで、淡路はかなり緊張した雰囲気、この曲を唄っていた。淡路は、1972年ごろの、日本テレビの連続ドラマ「地獄の特使！ワイルド7」というドラマに、桂木逸子という役名で出ていたようだ。何回か見た覚えはあるのだが、記憶はほとんど無い。そのため、長い間、神田広美と混同していた。改めて試聴すると、その歌唱はそう上手くはないが、素朴さと頼りなげな雰囲気が、この曲の内容にはとても合っている。その後、情報がまったくないので、引退したのだろうか。いまは、どう過されているのだろうか。

「初恋の頃」 詞・阿久悠 曲・平尾昌晃 1972

逢いたさに 胸こがし 裸足でかけたのは あれは16 春先の 水仙におうころ 好きだといわなけりゃ あの人は帰ると 思いつめ----

(収集プロフィール)

淡路まさみ(あわじ まさみ、195X～)女優、歌手。1970年代ごろ、活動。データ不足の為、詳細は不明。当時のジャケ写の淡路は、朝加真由美か五十嵐めぐみ風。

*詞、メロディー、歌手の三拍子が揃ったのに何故かヒットにならず。年が変わっても同じ場所で同じ時期に咲くタンポポみたいに純で可愛い歌。-

主な曲

初恋の頃

お茶にしましょう

月夜のマドンナ

恋は嵐のように

「あの人はいま」で、見たこともないし、だいたい、この歌手の存在自体、今はほとんど知られていない、とっていいだろう。当時でも、ごく一部の人々にしか知られていなかったのだから。サイトでレコードジャケットを見たところ、容姿は黛ジュンに似ている。黛ほど歌唱は上手くなく、声の質は違っていた記憶があるので、別人ではあるが。けれど、この曲は大名曲である。「バイカル湖のほとり」などの、ロシアの民族音楽を下敷きにしているのは明らかだ。それらを、うまく日本の叙情に、置き換えている。リズムカルでノリのよい主調に、哀愁と回想が、縋い交ぜになって、美しいハーモニーを作り出している。梢のどこか演歌の風味を帯びた、声が、この曲の深みを増している。この曲のリメイクには、松田聖子、島谷ひとみ、中川翔子などが、適しているだろう。

「恋のバイカル」1969年、発売。（詞：丹古晴巳・曲：山田隼人）

はじめての恋を 尋ねきてひとり ひとり来た 懐かしの 青い湖 空も雲も風も 愛をささ
やき 雲に花に鳥に 愛は消えても 忘れられぬ-----

（収集プロフィール）

梢 みわ（こずえ みわ、1950前後～）

あと5、6曲、オリジナルがあるようだ。が、あまり情報がないのだ。未確認だが、後年、若尾〇〇の芸名で演歌歌手として活動したとの情報がある。

ザ・ジェノバ (The Genova)

このグループで、私がよく知っているのは、この曲だけだが、当時たまたまテレビや雑誌に登場する程度で、やっと中ヒットくらいだった。ロシア音楽を下敷きにして、哀愁と望郷を乗せ、さらにはGSのサウンドを取り入れている。霧が降り、そこに走馬灯のように回想される物語。とてもいい曲だと、私は思うが、今のところ、大きな評価は得られていない。勿論、そこにそれ程、深い哲学や抒情がある訳ではないが。

サハリンの灯は 今なお消えず 俺の心に 赤く燃える 懐かしき山 姿もかすみ
海峡の風 白く凍る 北国の夏は 恋に似て 短い命_----

(歌謡曲黄金時代より)

ザ・ジェノバ：発想力の勝利？シベリアサウンドは21世紀も人々を魅了し続ける。

カルトGSの再評価が始まったのは、もちろん近田春夫の「B級GS特集」の功績が大きいがそのころの再評価第一陣の中で横綱とされたのがレンジャーズとこのジェノバだ。

ジェノバはもともと青春歌謡を志向していた北原じゅんの弟子たちが、GSブームに合わせて作ったGSだ。最初はコンガもいたが病気で脱退したという。(これは氷川きよし等の師匠である、水森英夫とのこと。) 英米一辺倒の和製ポップスの流れと中性化に対抗するため、古くから日本人に親しまれていたロシア民謡を取り入れ、男らしさを強調しさらに明治百年のムードを取り入れた反骨のバンドである。ちなみにバンド名は適当に決めたいらしい。当初は水戸浩二のバックバンドとして修練し、42年の末に水戸浩二の「君さえいれば」のバックを勤め、翌年2月「サハリンの灯は消えず」でクラウンからデビューした。このうたはオリコン37位のスマッシュヒットを記録。その後のちにサハリン三部作と呼ばれる一連のシベリアサウンドものを発表した。その年のうちにとある大スキャンダルでギターが交代し、同時にコロムビアに移籍、「帰り道は遠かった」をビクターのチコとビーグルスと競作するが振り返りにあった。その後はレコードを出すことはなかったが、しばらくクラブなどで活躍していたらしい。どうも音的にはラテン上がりっぽい「マサチューセッツ」などいわゆる普通のレパートリーも持っていた。

ジェノバと言えは歌謡曲を強調したバンドと言うことになっているが、敢えて彼らもロックバンドであったと主張したい。それもかなりいいセンスを持った。たとえば「さよならサハリン」である。この歌は文句無くカッコいい。やけに切れのいいドラムとファズギター、聞くものを高調させずにはおれないボーカル。ただ変というだけでは30年も生き残れなかっただろう。「サハリンの灯は消えず」はレンジャーズの「赤く赤くハートが」とともに「トンネル天国」や「電話でいいから」に対する裏のベストとして永久に聞き伝えられていくに違いない。

その後、北原じゅん氏の著作に「ダスビダーニヤ樺太 さよならサハリン」(サンケイ出版・昭和58年)なる著作があることが判明。つまり一連のサハリンシリーズは作曲家の思想から出た楽曲であることがわかった。若木香氏は北海道の放送作家らしいと聞いたが確認とれず。

山本はジェノバ解散後ソロ歌手に転身したが、その時分に随分モダンな様子で、全く歌謡曲の面影はなかったらしい。

(*未確認ですが、ご参考に)

平成15年に西田、山本と新メンバーにて再結成されクラウンからシングルを出している。

佐々木章二 ベース・岩本まさる リードギター（クラウン時代）・金原まもる オルガン
・西田憲夫 ドラムス（元・トシ伊藤とザ・プレイズメン、のち・松平直樹とブルーロマン）
・山本吉明 ボーカル・上田健一 ギター（コロムビア時代）

*メンバー

佐々木章二 ベース

岩本まさる リードギター（クラウン時代）

金原まもる オルガン

西田憲夫 ドラムス（元・トシ伊藤とザ・プレイズメン、のち・松平直樹とブルーロマン）

山本吉明 ボーカル

上田健一 ギター（コロムビア時代）

主な曲

昭和43. 2 「サハリンの灯は消えず」 詞・若木香 曲・北原じゅん 6. 5万枚

カルトGSの代表的名曲。力みに力んだボーカルとぶっといギター音が終戦当時の樺太からの引き上げ者の心情を余すところ無く歌っている。オルガンのスパイスが意外に効いている。実はボーカル以外に目を向けるとあんまりビート感が無く、曲調は普通の歌謡曲寄りのGSバラードなのだが、何かとんでもない。

「ダイヤの涙」 詞・若木香 曲・北原じゅん

彼らの出自がわかるラテンもの。ガレージなチープオルガンを先導にした軽快な曲だが、ムード歌謡に片足をつっこんでいる。リズムチェンジの工夫あり。

昭和43. 5 「いとしいドーチカ」 詞・若木香 曲・北原じゅん ランク外

出だしのトロイカのハミングは永遠に語り続けられるだろう。男男したボーカル、ギターは相変わらずだが歯切れのいいドラムがかっこいい。

昭和43. 7 「さよならサハリン」 詞・若木香 曲・北原じゅん

燃えたぎる激情、ほとばしる叫びと充分ロックなバンドの演奏、感傷の極まるマンドリンとストリングスのエキストラトラックどれもこれも過ぎすぎる。このバンドの最高傑作。ドラムの爆裂ぶりは相変わらず。たたみかけっぱなしの大名曲。

ほかに「ジェノバにしびれて」「月光の歌」「小雨のシーサイド」という3曲がCD化されている。録音時期から考えると「サハリンの灯」がヒットしなかったらムードコーラス路線で行く腹積もりがあったのではないか。「ジェノバに・・・」はまるで岡晴夫みたいな歌詞だが、快活ながらなんだかわからないバンカラな凄みのある曲調で当時のドラマの主題歌を思わせる佳曲。最後の叫びもわけがわからない。「月光の歌」は変な歌いまわしが耳に残るディープなムードコーラス調歌謡曲。サビの歌い回しは軍歌の「進め一億火の玉だ」を髣髴とさせる。バックキングでは前述の通り正式デビュー前に水戸浩二「君さえいれば」「作ってあげようネックレス」の両面でその演奏が聴ける。

カバー

「サハリンの灯は消えず」 スパンキー（ほかにフィリピンのガレージバンドがカバーしていると

いう未確認情報あり。)

「帰り道は遠かった」競作、カバー多数。

マニア系のウェブには、よく登場する望月浩。現在では、覚えている人を探すのが困難かも。私が若かった頃、4、5年の間、テレビ（庶民は、まだ白黒が主流）テレビや当時の雑誌などで見かけた。背も高く、やや童顔だがハンサムでスタイルもよく、キュートな青年とっていい、垢抜けた都会的な感じのタレントだった。当時ブームの終盤だった、ロカビリーから出て来た歌手らしい。たしか、テレビの若者むけのヴァラエティー番組で、司会もしていた。その後、なぜかほとんど見かけなくなり、すっかり忘れた頃、悲しいお知らせ（ニュース）が。2000年前後だったと思うが、彼が幹部を勤めていた、アパレル系の店で、偽のブランド品を売っていたとかで、他の数人の幹部とともに逮捕されてしまったのだ。かつてのあのスターが、お決まりの凋落か、と私はちょっとショックだった。それでも、あまりメディアにも載らず、その後、どうなったのかも情報はない。

ユーチューブ等に、5、6曲出ているので、試聴してみた。歌唱はなかなか良く、いまではあまり無い、駄々っ子のようなテイストが、かなりいい。また、ビートルズの来日公演の前座として、その映像のラストに、ドリフターズのあとに7、8秒唄う姿が記録されている。遅くはない、じっくりとリベンジして、出来ればまた素敵な曲を唄って行って欲しい。

*「機嫌を直してもう一度」この曲を、改めて聴いてみると、優れた部分がいっぱいある事に驚いた。当時の機器の性能を考えると、編曲・演奏・歌唱などすべてが、現在に劣らない相当な音楽的水準である。

(R.Povrazzo/川口真 *オリジナルは外国曲。昭和41年(1966)発売)

いま一度だけ 帰っておくれ 悪かったんだ 許しておくれ---君がいなければ 生きていけない
もう嘘なんかは けしてつかない 本当さ 僕の願いを-----

この曲は、昭和の終りごろになってBe-2という華やかな若い女性デュオがリメイクしている。聴いてみたが、ダンスブルで明るく楽しい。が、望月の歌唱に較べると、内容の深さやスケール感で、遠く及ばないようだ。

(収集プロフィール)

望月浩・1965年前後に、活躍した歌手・タレント。

(青春歌謡より)

*青春歌謡に限らず、いつの時代でも大衆がスターに求めるのは自分の及びもつかない「かっこよさ」であり「華やかさ」。そういう意味では、大歌手にはなれなかったけれど望月浩には捨てがたい魅力があった。ヒット曲は小生の知る限りでは「一人ぼっちが好きなんだ」「君にしびれて」「泣かないで」「涙ビリビリ吹きとばせ」の4曲。それと昭和47年頃「機嫌を直してもう一度」がヒットした程度です。「泣かないで」以外の曲はリズム歌謡なのに対し、「泣かないで」はややテンポがゆっくりした曲です。望月の甘いマスクと、舌の回らない感じの独特のキャラクターが曲の節々にあふれていることから、曲が生まれて30年経った今、再評価した次第です。

*65年～66年にエレキ歌謡が歌謡界にブームを興した。代表的な歌手としては、「西郷輝彦」「

三田明」等であるが私は「望月浩」を第1人者に挙げたい。

*「一人ぼっちが好きなんだ」 望月浩

デビュー盤？カバー全盛時代のちょっとあと、遅れてきた望月浩。2年早ければそこそこいけた人だと思うのですが、いかんせんB4以降です。路線に苦労してしまった人ですが、当時よくTVではお目にかかれました。この曲はなかなか、というかかなり良い。オリジナルですが自分は大好きです。♪ヤンヤヤーで始まるバックの女性コーラス隊の盛り上がりは円熟度高いですし、望月浩も基本的にうまい。確かモッチンという愛称だった。

*ちなみに、同時購入したレコードは、山田太郎「友情のうた」、三田明「若い港」、阿木譲「高原の慕情」です。1万円を超えてしまったのは言うまでもありません。青春歌謡の魅力と無縁な方にとっては無駄使いと映ると思いますが、小生にとっては超トクした気分。

「泣かないで」（1964：作詩：タカオカンベ 曲：萩原哲晶）

少し行っっては 立ち止まる 胸につかえる おくり道 赤い夕日に 叱られそうな 二人は初恋 まだ高校生---いいね 泣かないで 涙をふいてから

*当時の子供は、望月浩を知らなくても、彼の歌うTV「光速エスパー」の主題歌は、皆知っていた。（1967 吉岡治 作詞 服部克久 作曲）

バババババビュンと空を行く。光より速いのさ。輝く強化服 カッコいいぞ。僕らの僕らの光速エスパー

（レアなシングル盤より）

(1965)「一人ぼっちが好きなんだ」（詞：こうのあきら 曲：あづまのぼる）

一人ぼっちが 好きなんだ あの娘をデートに さそってみても

(1965.5)「泣かないで」（詞：タカオカンベ 曲：萩原哲晶）

赤い夕日に 叱られそうな 二人は初恋 まだ高校生

(1965.10)「野菊は哀し僕の花」

(1966.1)「君にしびれて」（詞：沢ノ井千江児 曲：萩原哲晶）

風が吹こうと 花散ると 僕の恋人 君一人 鳥が啼こうと 啼くまいと

「涙ビリビリ吹きとばせ」（詞：沢ノ井千江児 曲：萩原哲晶）

悲しみなんか どこ吹く風さ さみしさなんか どこ降る雨さ とばせとばせ 真っ赤なエレキ

*その他

黄色いレモン

あなたのおもかげ

(1967) 星になるまで

涙をふいて

(1967) あいつにさよなら

星降る浜辺

(1967) ひとりぼっちの誕生日

初恋の海

(1968) ひとりぼっちの世界

こぼれた涙

(1968) 夜明けの太陽

愛してもなにも

(御三家・青春歌謡より)

「機嫌を直してもう一度」 望月浩

以前Be-2がカバーしたシングルは持っていたけれど、この歌は男の人がねちっこく歌う方があって、元々この歌自体は「ウソップランド」で、怪物ランドの郷田ほづみの歌唱で知ったので、望月浩じゃないとだめ。

「一人ぼっちが好きなんだ」 望月浩

デビュー盤？カバー全盛時代のちょっとあと、遅れてきた望月浩。2年早ければそこそこいけた人だと思うのですが、いかんせんB4以降です。路線に苦労してしまった人ですが、当時よくTVではお目にかかれました。この曲はなかなか、というかかなり良いのです。オリジナルですが自分は大好きです。♪ヤンヤヤーヤンヤヤーで始まるバックの女性コーラス隊の盛り上がりは円熟度高いですし、望月浩も基本的にうまいです。確かモッチンという愛称だったと思います。

*華の昭和名歌300のI~IXは、今後10年をかけて、順次、刊行して行きます。いちぶは、印刷版になる予定です。

輝くような、美少年だったとか。当時のテレビは、ゆがみ数多、走査線ふとく、白黒度もボケ気味、その他の欠陥も多く、という5重苦、8重苦の、激しいイマイチもの。テレビの画像に、5割り増しで評価していた気がする。いまから考えると、映りの悪い人や、映り方のテクニックをあまり持っていない人は、9割り増しくらいしてもよかったのかも。並みの容姿の人が、とてもおブスに映っていたのかも。というのは、叶修二は、美青年ではあったが、当時のテレビでは、それ程素晴らしくは思えなかったのだ。これは、以前取り上げた、吉村絵梨子も同じ。現在、ネット上で流布している、ブロマイドやジャケット写真の、なんと映りの悪い事。とても、気の毒。まあ、人間は、時代から逃れられないのだから、仕方ないのか？さて、本題の歌。この曲は、すでに定評を得ているように、いい曲である。歌唱は、まあ水準を超えているだろう。やさしく淋しげで、柔らかな、若い歌声。まだ、人生の、重さと苦さを、ほとんど知らない者のみが、歌いえる歌唱。これは、彼のほかの歌にも通流する。昭和40年代の一時期（5年前後）、かなりの活躍をみせ、その後、急速にパワー・ダウンしていった歌手。

（作詩：水木 かおる、作曲：継 正信）

まぶしいように ボクを見る あの娘の瞳を 見ていると なぜか涙が こぼれるよ 素敵
なやつ 素敵なやつ 抱きしめたいほど 可愛くて ボクを夢中に---

（収集プロフィール）

叶修二（かのう しゅうじ、1946?～ ）は、日本の歌手。新潟県新潟市西区内野町出身。

略歴

ポリドールからデビューし、「素敵なやつ」などのヒット曲を出す。1967年には、レコード会社各社の競作で発表された「世界の国からこんにちは」のポリドール版音源を発売した。遠藤実は叶修二の名付け親であり恩師であったが、レコード会社が異なっていたため、ペンネームで作曲をしてもらった楽曲もある。

*叶修二は新潟市にいます。時々見かけますが今も元気にはしているようです。歌は専門にはしてないようですが近くのカラオケで歌っているらしいです。ご本人経営のレストランが「グルメガイドサイト」に記載されるほど有名です。

*現在は、新潟市内でレストランバー「B.friend」を経営しているようです。

主な曲

素敵なやつ

世界の国からこんにちは

アカシアの別れ

いつもの人は

私が子供のころ、彼女は、その当時のメディア（白黒テレビやラジオ、商店街の流す音楽、週刊平凡・明星など）で、大活躍していた。坂本九やパラダイス・キングなどとともに。当時の機器の性能でも、彼女の歌唱は素晴らしく、私は、森山はいずれ大歌手になると、思っていた。ところが、ある時期から、彼女は、マスコミにほとんど姿を見せなくなった。長い間、不思議に思っていたが、8年後「白い蝶のサンバ」で復活。それによって、その理由がハッキリとした。彼女は、ある大手事務所から、契約満了で独立したのだが、そこからプロモーションが、うまくいかなくなってしまったのだ。理由は、すこし違うが、最近では、鈴木あみの話題があったように、こういうケースは、複雑な問題を孕んでいるのだ。森山は、その間、キャバレーなどの地方のドサ回りがほとんどで、声を荒らしてしまった。運よく復活はしたが、森山は、大歌手になるための、重要な時期を失ってしまった。古いしきたりや独自のルールは、理解できるが、考えてみれば、気の毒であり、またとても怖いことだ。スケールは、小さくなるが、黛ジュンも、同様のケースといわれている。

（詞・曲 F.Migliacci・B.De Filippi 訳詞・岩谷 時子）

そしてお月様 ねえ彼を帰して---チンタラデイルナ あの人を街で---

（プロフィール）

森山 加代子（もりやま かよこ、1942- ）は、北海道出身の歌手。

略歴

1960年代を中心に活躍し、洋楽をベースとしたコミカルなイメージのヒットソングを多く持つ歌手である。ニックネームは「かよチャン」。札幌のジャズ喫茶で歌っていたところをスカウトされて、デビュー。1960年、デビュー曲「月影のナポリ」が50万枚を売り、いきなりの大ヒット。続く「メロンの気持」「月影のキューバ」などヒットを連発。また新人としては異例の早さで同年のNHK紅白歌合戦に初出場した。以降洋楽をベースにしたコミカルな歌を何枚もリリース。特に1961年リリースの「じんじろげ」は強烈な歌詞と共に、流行語にもなったほどでもあった。数年の低迷期を経て、27歳で結婚。結婚後の1970年にリリースした「白い蝶のサンバ」は従来のイメージをガラリと変えたポップな歌謡曲であるが、これも大いにヒット、ミリオンセラーとなる。

現在も、舞台やショーで歌手として活躍中。

主な曲

「月影のナポリ」（ザ・ピーナッツとの競作）

「メロンの気持」

「月影のキューバ」（洋楽『MAGIC MOON』カバー）

「じんじろげ」（作詞渡舟人、作曲中村八大）

「ズビスビズー」（洋楽『ZOO BE ZOO BE ZOO』カバー）

「パイノパイノパイ」（オリジナルとは歌詞が違う）

「可愛いベイビー」（中尾ミエのバージョンでも有名）

「白い蝶のサンバ」 （作詞阿久悠、作曲井上かつお）

「レモンのキッス」

紅白出場曲

第11回 1960年（デビュー年）

月影のキューバ

第12回 1961年

シンデレラ （訳詞 みなみカズみ）

第13回 1962年

五ひきの仔ブタとチャールストン

第13回 1970年（8年ぶりの出場）

白い蝶のサンバ

私は、この歌手とほぼ同時代人だが、テレビで見かけたのは、3、4回くらい。だから、これといった印象が、無いのだ。曲も、大ヒットや、これといった秀逸なものは見当たらない。資料によると、当時のメディアによく出ていたようだが。私は、この頃悩みが多く、本を読んで解決を求めたり、あれこれ思いを廻らしたり、と意外にテレビを見る時間がなかったのだ。そのわづかな記憶を、無理に引き出してみると、整った容姿（キャッチが美少年・美青年。スポーツマン系で、パツと華やぐような。実年齢より、5歳は大人に見えた。）、声は久保浩に近く悪くないが、歌唱はまあまあのレベル。人気は、かなりあったようだが、4、5年も経つと、あまり見かけなくなっていた、ように思う。その後、名古屋では、早過ぎる晩年まで、それなりに活躍していたようだが。今回、8曲ばかり聴いてみた。同じ第4世代と言われる、望月浩と叶修二に比べてみると、歌唱力以外は、優劣は決めがたく、キャラの色違い、と言うのが正しいだろう。

「胸に飾ろう幸せを」1964年

花も小鳥も あの空も ふたりで見ると 美しい 好きなら好きと 打ち明けて ああ-----

(収集プロフィール)

川路 英夫（かわじ ひでお、1948～1986）名古屋市守山区出身。愛知学院高校(先輩に舟木一夫、同級生にクラウンの鹿島一郎、キングの西川一也)在学中、ビクターの新人オーディションに合格。同年11月『胸に飾ろう幸せを』でデビュー。高校生(明大付属中野高校編入)とは思えない抜群の歌唱力とルックスで、叶修二・望月浩と共に「青春三羽鳥」「可愛い子ちゃん歌手」などと呼ばれ、TV・舞台に活躍。趣味は鳩・じゅうし

まつの飼育、下駄の収集。歌を始めたきっかけは、友達の鹿島一郎に歌謡学院に連れて行かれて。間接的には、学校でいじめっ子と喧嘩をして、おとなしいばかりじゃいけない。自分の好きな事をやり遂げようと決心。

*名古屋の東海ラジオに五木ひろしが出演、下積み時代の仲間、川路英夫や鹿島一郎の話をしていました。鹿島さんとは今も家族ぐるみの付き合いがあるそうです。

*叶修二・望月浩・川路英夫。当時を知る人の中に強烈な印象を残していなかった事は残念ですが、青春歌謡を語るには抜かしてはならない人達です。

*1964～1966青春歌謡全盛期

第1世代 橋幸夫・舟木一夫・西郷輝彦

第2世代 三田明・山田太郎・美樹克彦

第3世代 久保浩・梶光夫・安達明

第4世代 川路英夫・叶修二・望月浩

第5世代 北上淳也・泉幸二・港孝也

第6世代 永井秀和・阿木譲・水戸浩二

ずっと、気になりながら、必要なデータが入手できずに、今回やっと取り上げる方。当時の白黒テレビでときどき見かけた吉村は、ネット上に流布しているブロマイドの容姿を、はるかに上回る美女で、ネーミングのエピソードが「山奥の村に咲いた、絵に描いた梨の花のように美しい人」だった。それが、過言ではないほど、華やかでありながら、清楚で控え目な、若い女性だった。ただし、歌唱のほうは、あまり頂けないようだ。張り付くような、高音を多用した、童謡のように平板で、あまり心に響かない歌唱。けして、上手くはなく、下手でもない歌唱。単調で、高低差の少ないメロディー。吉村に合わせたのかも知れないが。まあ、曲もいまいち？だが。そして、なぜか3年ほどの活動で、急に引退してしまったのだ。その後、一度だけ、彼女の消息を知ったことがある。現在もある、有名な週刊誌で。引退後、約2年。忙しさと、人間関係などに悩み、引退を決意したという。いまは、銀座の高級店で、ホステスをしているという。吉村の言葉のなかに、印象的な言葉がひとつあった。「私ね、静かな暮らしがしたいの。それでね、名もないお金持ちになりたいの。」いまは、普通の主婦になっているのでは？

「待っていてね」（作詞：丘灯至夫・作曲：船村徹）

待っていてねいつもの角で待っていてね 急いでいくわ離れていると泣きたくなるの愛していると今夜も言って待っていてね 帰っちゃいやよ待っていてね もうすぐいくわ---

（収集プロフィール）

吉村 繪梨子(よしむら 1947?~) 福岡出身。65年ビクター。船村徹に師事、66年コロムビア。67年7月度ブロマイド女性歌手4位。

*コロムビアにいた、美人歌手です。船村徹門下で、船村さんの著書にも、未発表曲含め、掲載あり。しかし、レコードの復刻は、一切ないままで、幻のアイドル演歌歌手です。

*「暖流／涙の真珠」の、美形同士、島和彦と並えはないんでるジャケットがいい。

*ブロマイド売上(マルベル)67年7月：1位：松原智恵子、2位：園まり、3位：吉永小百合、いむら えりこ4位：大原麗子、5位：由美かおる、6位：酒井和歌子、7位：内藤洋子、8位：山本リンダ、9位：恵とも子、10位：吉村繪梨子、11位：水前寺清子。

*今じゃ子もある妻もある、と歌う寺山修司・作詞のムード演歌「ゆび」も捨て難い。

*吉村繪梨子と言えば、♪青いシーツに口紅で... (寺山修司・詞) が心に残る。

*60(59~60)年「明星」歌手投票■①美空ひばり②島倉千代子③大津美子④松山恵子⑤コロムビア・ローズ⑥石井千恵⑦ペギー葉山⑧野村雪子⑨藤本二三代⑩雪村いづみ⑪ザ・ピーナッツ⑫丘ひろみ⑬能沢佳子⑭江利チエミ⑮君和田たみえ⑯朝倉ユリ⑰五月みどり⑱奈良光枝⑲松尾和子⑳香川万知子(西村つた江)

*能沢佳子さんは、作曲家・飯田景応の娘で、古賀政男の弟子で、船村徹夫人。

*福岡の小学校を出て、中学は、東京・杉並区の神明中学校卒業。

主な曲

逢うときはいつもリラの花

覚えている方は、ほぼいないだろう。売り出して1年後でも、知名度は低く、すこし人気があるかな、といった程度の歌手だったので。私は、その当時のテレビで、4、5回見たことがある。ジャケット写真に見るように、スポーツ選手タイプのまあまあの容姿で、曲も歌唱力もまずまずだったが、なぜかブレイクしなかった。プロモーションが下手だったのか、売り出し競争に負けたのか。とまれ、この時代特有の、何とか名前は留めたが、マイナー青春歌手のひとり。今回、4、5曲聴いてみた。「君を信じて」とB面「ふたりのための恋だから」の2曲は、なぜか息継ぎ（呼吸？）音がかなり入ってしまい、それが耳ざわりなのが残念。当時の技術では、修正出来なかったのだろうか？ほかの曲では、ほぼ感じなかったが。とまれ、下の曲はかなりの佳曲だ。

「君を信じて」（詞・阿蘇健/曲・北原じゅん）

星がとんだね 夜風が甘いね 話しても 話しても つきない 君と僕 すねたりしないで
いい娘だろ いつものように ほほえんで お休みって――

（収集プロフィール）

水戸 浩二（みと こうじ、1946?～）茨城県出身の歌手。テレビの勝ち抜き番組で10人抜きを達成して、デビューしたとのこと。私には歌謡曲のイメージが強いが、すでに過去の人、だが「ひとりGS」のカテゴリーでは、今でもかなり評価されている。

*水戸浩二という歌手は、私が10代の頃、当時3、4年の間、ときどきテレビなどに出ていた。スポーツ刈りで、草野球の選手が歌手になったような感じの人だった、と思う。ただ、映像の記憶はあるのだが、肝心の歌唱の記憶が、ほとんど残っていないのだ。声の記憶が、薄いのだ。つまり、曲にあまり恵まれなかった歌手といえよう。

*当時の歌本をみると1967年の6月に「君を信じて」でクラウンからデビューしています。

*「君を信じて」バックザ・ジェノバということで有名なレコード。粘っているが普通のエレキ青春歌謡でありジェノバ色はない。但し一箇所だけ入るコーラス（山本吉明）の方がしっかりしていて、魅力的な声をしている。

*19歳で東映のニューフェイスとなり、「饑餓海峡」など劇場用、テレビ用映画合わせて30本に出演した後、レコード界入りして青春歌謡を歌い続けたもののヒットに恵まれず、テレビの全日本歌謡選手権で10週勝ち抜いての再出発に与えられた歌。

福岡での発表会には、水戸が福岡で働いていたステーキ・サロンの社長の友人で天台院の住職、作家、参議院議員の今東光（こん・とうこう）氏が駆けつけ、後援会長も引受ける。

*男の一人GSが脚光をあびないのは？

*永井秀和・阿木譲・水戸浩二のように新御三家として売り出されながら、大きな成功を収められなかった人達など。

主な曲

「涙のボサノバ」

「君さえいれば」（水島哲 詞・北原じゅん 曲）

「さよなら長崎」

懐かしく、また嬉しい唄声である。淋しく辛いテイストと、全体に望郷と哀愁に満ちた唄である。この曲は演歌系歌謡曲だが、私は確認していないが、平成20年頃のあるネットのインタビュー記事では、森田はその後はポップス系に移行したという。ともあれ、この曲は当時かなりヒットしたが、その後は徐々にメディアからフェードアウトしていった歌手である。ヒットが続かなかったこと以外、その理由は分析できないが、実力は抜群であり、とても惜しい方である。

(なかにし礼・詞 浜圭介・曲)

ふるさとは 遠い北の果て 潮風の吹く町 荒れた手をして 網をあむ 小さな母の肩 浜なす
の花が 咲く頃に-----

(収集プロフィール)

森田 由美恵 (もりた ゆみえ、1955～) 神戸出身の歌手。現在は、ボーカルスクールの講師で経営者という。

経歴

1969年、「全日本歌謡コンテスト」に優勝、1971年、16歳のとき、「潮風の吹く町」でデビュー。その年の各種新人賞を獲得し、実力派少女歌手と期待される。また、歯切れのよいおしゃべりで、司会やDJでも売れっ子に。しかし、歌手としてはシングル、アルバム含めて10枚出すも、翌年にデビューした山口百恵、森昌子、桜田淳子の“花の中3トリオ”の陰に隠れてしまった。

*21歳で自律神経失調症にかかり半年間、芸能界を離れた。27歳のときには歌手では食べていけなくなり、パン屋さんでバイトを。今でも歌手は続けていて、苦節33年、この秋にコンサートを開く予定。

*若い頃の苦労が今になって実になっている。とくに18年前ある塾に通って、ボイストレーニングや呼吸法を一から勉強。訓練を重ねるうちに自然治癒力が増し、それまで“陰”だった体が“陽”になった。

*2004年頃、恵比寿にスタジオが3つある「WIS ARTS VOCALSCHOOL」を設立。

*独身。結婚歴はない。自分のことを振り返る余裕もなくやってきたら、いいトシになってました、とのこと。

3年程前に、取り上げる予定だったが、あれこれ手を尽くして調べても、そのときは余りにも資料が集まらず、断念した。今回、改めてトライした所、いちおうの資料が集まった。こう書いて来ると、最上が世に隠れた偉大なアーティストだったのか？と思う方もいるかも知れない。実際は、素晴らしい歌手ではあったが、名曲は一曲だけ。歌手としての活動も、2年足らずという、いまいちだった歌手である。私がここで取り上げるのは、素晴らしい実力を持ちながら、さまざまな事情でフェードアウトしていった、惜しい歌手のひとり、としてである。最上は、梢みわ、岩城徳栄、山川ユキ、牧葉ユミ、段田男、清水由紀子、などの系譜に入るアーティストなのである。

デビュー後、1年余りは、メディアでときどき見かけたが、その後、パツタリ見かけなくなった。その2年後くらいに、病院か床屋の待合いで偶然眼にした雑誌に、最上の記事が2Pほど載っていた。それによると、彼女は、仕事上の何かのトラブルで、事務所を辞めた（芸能界では、次のプロが身請け？しない限り、普通、引退を意味する）のだという。そのときの最上は、神奈川県のとどこかで働いていた（はっきりとは書いていなかったが、旅館か料亭の感じ）。そして、記者に、何とかもう一度唄いたいと、希望を語っていた。その後、最上の情報は、まったく絶えてしまった。私は、この曲は、戦後の昭和ベスト50に入れていい名曲だと確信している。

（詞・川口文 曲・やまだ寿夫）

山の麓の夕焼け小焼け 祭りの太鼓にひかれて踊る 好きなあの子とさくらんぼ
小さな口で 一粒噛めば---ハァー 思い出します 故郷の あの人 どうしているかしら
（ウィキペディアより）

最上 由紀子（さいじょう ゆきこ、1954～）、山形県最上郡出身、山形県立大石田高校。スター誕生からでた歌手。デビュー当時は18歳。

*泰葉にちょっぴり似ているレコードジャケットによると、当時のプロフィールは、身155cm。尊敬する歌手は、越路吹雪、都はるみ。ニックネームは、山形名産の「さくらんぼ」とかけて、さくらんぼユツ子。こぶしが見事にコロコロ回る、おみごとな民謡歌唱。最上も、やはりロウソクの炎を揺らすことなく声が出せるのだろうか。幼い頃からいろいろな歌謡曲を口ずさんできて、「節回し」の部分はマネできて、この「こぶし」のマネは到底できるものではない。一度でいいから「こぶし」コロリンコロリン回してみたかった。

最上のバックボーンに、民謡があったのは想像がつく。出身地の舟形町では、この年(昭和48)に「最上由紀子後援会」が結成され、会員は1170名だったそう。

作曲のやまだ寿夫は聞き慣れないお名前で、まるでローカルで活躍する先生なのかと想像最上の「初恋」は、オリコン最高37位、売り上げ枚数6.7万枚という好評な出だしだったようだが、次のシングル「初恋の里」以降はグーンと印象度が減ってしまった。

もしかして「スタ誕」ゲスト出演は昭和49年(1974)1・6放送で最後？わずかな芸能生活だ。それから月日が経ち、すっかり最上様のことを忘れていたある日。

よくぞ、忘れられていたこの歌に光をあててくれました～って感じで。

このCDに載っている近況だと、「最近結婚ホヤホヤの幸せな奥さん」とある。

そして、今から数年前、NHK-BSで「スター誕生」の池田Pを特集した番組があり、偶然チャンネルを替えたら最上の近況が映し出されていた。残念ながら、ホントにちょっとだけ、最後の部分だけしか観れなかった。ただ、ごく普通の主婦として共働きしていて、仕事に出かけられていた姿だけ拝見できた。

「病気で寝たきりの父親を介護しながら、ご主人と警備会社で共稼ぎされている」という情報があった。あんなに歌がお上手でも、あっさり引退され、平凡な日々の生活に幸せを感じていらっしゃる様子だった。が、最上が再びマイクを持たれているという情報を発見。平成19年2月(土)、山形県米沢市の伝国の杜置賜文化ホールで行われた『荒井幸博と唄おう』で、30数年ぶりに歌を歌ったらしいのだ。記事によると、歌われたのは「好きになった人」、「初恋」で、30年ぶりのブランクを感じさせない唄いっぷりとある。

*デビュー曲では百恵さんの「としごろ」とほとんど遜色ない成績だったのですね。なのに新人賞レースは新宿音楽祭に出場した(銅賞)ことしか記憶にありません。

引退直後に週刊誌に手記が掲載されてたんですが、これも「今日は何も(賞が)獲れないけど歌ってくれ」って事務所から言われたんですって。こういうのって初めから決まってるんですね。わりとあっさり引退しちゃって、芸能界には懲り懲りだったみたいで、妹さんが夕誕に応募しようとする止めたらしいです。芸能界って想像以上に大変なんでしょう。

*昨年2月と9月に最上由紀子さんを誘い、米沢市で唄って戴きました。デビュー当時と変わらぬキーに鈴を転がしたようなこぶしは健在で聴き惚れた。

デビュー曲の「冒険」はリズムカルで楽しいが、繰り返し出される「けっきょく5人の子供ができただけ」という、メインフレーズが愉快だ。けれど、心に残るのは、やはり「回転木馬」だ。歳のいった人には、いまいちだろうが、若い世代には、ワクワクするような内容である。すでに30年以上前の曲だが、いまの若い人達にもペアリーな唄である。明るく綺麗な女の子、のイメージがあったのだが、ジャケットの彼女は、飾り気がなくボーイッシュで、色気をまったく売り物にしていない。当時としては、珍しいプロモーションである。この曲は、不思議な曲で、その当時、メディアにあまり登場しなかったし、中ヒットまでは行かなかったと思う。あとから、じわじわと浸透してきた曲である。いまでは、かなりの人の知る名曲となった。

(片桐和子 作詞 ベンチャーズ 作曲 1972)

あのとき ふとさびしくて 夜の浜辺を ひとり歩いてた あなたは 岩にもたれて ギターを---不思議な不思議な めぐり逢い 夜空の夜空の浜辺-----

(ウィキペディアより)

牧葉 ユミ (まきば ゆみ、1953-) は1970年代前半に活動した女性歌手。東京都北区出身。目白学園高校卒業。テイチク→徳間音楽工業。

1971年7月、「冒険」でデビュー。同年、第13回日本レコード大賞作詞賞受賞(作詞、北山修)。ボーイッシュな外見と活発なイメージを持った歌手であった。

1973年、サイン会場でたまたま居合わせた、当時中学3年生の相本久美子を直接スカウトし、芸能界入りのきっかけを作った。

また牧葉ユミのシングルのうち、後に「スター誕生!」で山口百恵が「回転木馬」を、桜田淳子が「見知らぬ世界」を歌い、それぞれ歌手への第一歩を踏み出すことになった。

1975年、相本久美子の移籍と前後して芸能界を引退、所属事務所も解散したという。

この20年近く、メディアで、ほとんどみかけないと思ったら、やはりスキャンダル（あるラジオ局で、暴言を吐く）があったとか。ヒット曲も多く、実力のある歌手だけに、残念。若い頃は、外見的には、サラリーマンぽい、おとなしくスマートで、かなり細面のイケメンだった。だから、そんな事件？を起こすとはと、ビックリした記憶がある。あとから聞いた噂では、普段からアル中に近い状態だったとか。やっぱり何かあったんだ、とは思ったが、テレビの彼からは、そんな感じは全く受けなかった。精神が、弱かったのだろうか。それ以来、姿を見なくなった訳だが。いまは何をして、いらっしゃるのだろうか？ドサ回りでも、唄をつづけていると、いいのだが。ド演歌からムード歌謡、ポップスまで、自分のテイストで、自在に唄いこなせる貴重な歌手である。

「花から花へと」（詞・白鳥園枝 曲・むらさき幸）

酒場女のぐちなど誰も どうせまともにゃ---だめなのね お酒があなたを変えたのね---

（ウィキペディアより）

島津 ゆたか（しまづ ゆたか、1947年7月-）は演歌歌手。

経歴

小学生時代から各種コンクールで注目された。昭和45年「つかれたわけじゃないわ」でデビュー。昭和55年デビュー10周年記念の「花から花へと」が大ヒット、以後「片恋酒」「ホテル」とヒットを続け、日本歌謡大賞など次々に受賞。しかし、2002年10月にゲスト出演していた公開ラジオ番組で不適切な発言を連発、退場処分を受けた。それ以後目立った活動を行っていない。

主な曲

つかれたわけじゃないわ（詞 中村泰士・土井郎 曲 中村泰士）

ホテル（詞・なかにし礼 曲・浜圭介 1985）

片恋酒

女のゆりかご

くせになりそう

北から南から

ふたり道

北から南から（詞・阿久悠 曲・三木たかし 桂五郎のカバー）

ふたり道（詞・荒木とよひさ 曲・叶弦大）

伊吹あきら（遠藤 良春）

競作だったのか、カバーだったのかは分からないが、「旅の終わりに」を聴いてみた。冠二郎のような男っぽさは無いが、唄も上手く、要所に高音が裏返るようなコブシを効かせ、かつ全体にほのかな哀愁が漂い、なかなか良い。一般的には、冠の歌唱が優勢だが、どちらが良いかは好みの問題だろう。今回、7、8曲、試聴してみたが、この曲はとてもいい。特にさびの、風花の舞う、のすこし捻った歌唱部分が、とても印象的だ。演歌なのだが、ピアノをストリングスのように取り入れた、流麗で哀愁と浪漫にみちたメロディーも秀逸。資料によると、すでに歌謡界を引退しているようだが。また名曲に出会ったときは、ぜひまた歌って欲しい方だ。現在の歌手があまりもっていない、洒落ていて哀愁と深みがあり、さらに力強い歌唱力をもった、かつての桂五郎のような歌手である。

「風花の町」

いつもあなたの口癖だった 幸せにしたいおまえだけ 幸せはそんな遠くじゃないんです 風花の舞う 北の街 ああ 頼すり寄せる あなたが欲しい-----

（収録プロフィール）

遠藤 良春（えんどう よしはる、1956.6～ ）北海道出身の歌手。

「GO!GO!掛布」は、関西地区を中心に126万枚の大ヒットを記録した。B面は「大きな星になれ」だった。曲は細川たかし「女の十字路」他を手がけ、当時日本の歌謡界をリードしていた中山大三郎。近年でも、天童よしみらを手がけている人気作詞家だ。遠藤良春は100万枚を超えるようなヒットはこの曲だけだが、新世界地下など関西地区を中心に、地道に活躍していた実力派の歌手だ。99年5月に 銀河に輝くタイガース／演歌阪神タイガース（詞：藤原栄之 曲：服部耕治）をリリースしている。

主な曲

高校さすらい派

雪しんしん

ゆさぶれ青春

この俺でよかったら

こぼれ花、ボロボロ

GO!GO!掛布

大きな星になれ

*（伊吹あきら名義で）

口紅

風花の町

トミ藤山（別名義・山路 智子 オリエンタル・カレーの唄）

記憶の中のこの唄は、かなり演歌調(ラジオからの記憶)だったが、テレビの探訪番組(関西系の「ナイト・スcoop」やTBSの「そこが知りたい」など)では、カントリー・ウェスタン風の女性が、改造トラックの宣伝車の前で、バンジヨーを掻き鳴らしながら、この唄を軽快に唄っている。この会社のHPの試聴でも、同様の光景であるが、その歌唱は、やや演歌がかっている。ちょうど、上沼恵美子(元・海原千里/万里)の歌唱法に近い。はてさて、記憶の錯誤だったのだろうか。学校からの帰り道、ふと何処かの家のラジオから、この唄が流れて来た。曲調に郷愁を誘う何かがあり、徐々に暗くなっていくオレンジの夕暮れの景色のなかで聴くと、いっそう印象が強いのだ。ほぼ同時期の、レナウンの「レナウン娘の唄」と並んで、初期のCMソングとして、出色の傑作である。

(作詞：大高ひさを 作曲：平川浪竜 歌唱：山路智子[トミ藤山])

なつかしい なつかしい あのリズム エキゾチックな あの調べ オリエンタルの 謎を秘め
香るカレーよ 夢の味 あゝ 夢のひと時 即席カレー 君知るや 君知るや オリエンタル
カレー/ガンジスの ガンジスの 岸に咲く ピンクシャワーの 花の影---

(収集プロフィール)

トミ藤山(とみ ふじやま、1940～)本気でモダンで、レコードとラジオをこよなく愛する父からたくさんの楽曲を聴かされて育った少女は、やがて日本におけるカントリーウェスタン歌手の草分けとなった。我が国における数少ない、女性カントリー・シンガーの一人。

1953 名古屋から上京。テイチクと契約を結び、山路智子の名で歌手デビュー。後に歌謡曲からカントリー歌手へと転向。米軍基地内のクラブでのライブショーに出演。

1954 「オリエンタルカレーの唄」がヒット。

1959 コロムビアに移籍し、トミ藤山となる。

1950年代～1960年代 米軍キャンプ、クラブなどで精力的に活動。

1964 米軍キャンプでの活躍が認められ渡米。ラスベガス"THE MINT HOTEL"でショーを始める。(6週間単位の契約が12回更新。)

1965 「LONELY TOGETHER」がアメリカのカントリー部門で日本人初のチャートイン。

1995 15年間の沈黙をやぶり、再始動。アルバム『ロンリー・トゥギャザー』を発売。

1997 8月にNASHVILL WSMラジオの「ミッドナイト・ジャンボリー」に出演。

1999 COMSTOCKレコードよりオリジナル曲「BOOGIE WOOGIE YODEL」がアメリカ、ヨーロッパの放送局に配送され、インディーズ部門で5位、ヨーロッパでは総合14位となる。

2000 NHK「ラジオ深夜便」に出演。(2007年まで)

2002 セカンドアルバム『ゴールド』を発売。

2004 自叙伝「ころび 転ぶよ 音楽人生」を出版。この出版に伴い、かまやつ ひろし、森山良子、らを迎えコンサートを開催。

2007 赤坂・草月ホール「トミ藤山わがままコンサートPart.2」を開催。

2010 高円寺・次郎吉で古稀バースデーライブを行う。日本調歌謡曲のアルバム「昭和歌謡名

曲選」を、ギター弾き語りで発表。

*これまでに、SP盤15枚、シングル盤18枚、LP盤7枚、CDアルバム4枚をリリース。

*好奇心とヤツタルデ精神に溢れる彼女はヨーデル歌唱法にも挑戦。日本で唯一の女性ヨーデラーとしてアニメ『アルプスの少女ハイジ』のオープニングもこなした。

(社史より)

昭和20年。だれしもが特別な思いを抱くこの年、いまでも残る最長寿インスタント・カレーは生まれました。戦前から、カレーライスが"洋風"料理として家庭にも少しずつ浸透し、人気を博していましたが、その作り方は、炒めた小麦粉にいわゆる純カレー粉を混ぜるというもので、意外と手間のかかる作業でした。地元愛知県内で小麦や砂糖などの食料販売を細々と手がけていた星野益一郎は、終戦になると新しい事業を模索していましたが、カレーが家庭料理として普及しつつあることに着目し、その料理方法をより簡単に作る商品を作れば売れると考えました。そこで、炒めた小麦粉に純カレー粉をあらかじめ加えた粉末状のインスタント・カレーを作り、『オリエンタル即席カレー』を完成させました。

当時あんパン1個が5円。この『即席カレー』は5皿分で35円。決して安くはない価格にもかかわらず、家庭の主婦はこれを喜んで台所に受け入れました。この『即席カレー』の意外なほどの人気ぶりに、星野はこれを愛知県内だけではなく全国的に販売していこうと決意し、宣伝カーを使って各地を回ることになりました。

*「宣伝カー」4トントラックを改造し、全国各地を回った。芸人たちはすべて正社員だった。

*宣伝カーから流れるアナウンス

当時の営業部員・加藤巖（オリエンタル顧問）は言う。「音楽を奏でながら町を走り、人が集まってきたところでショーを見せ、最後に『即席カレー』を試食してもらうという内容。娯楽のない時代でしたから、ハチの巣をつついたように人が集まってきて、一回に1000個ぐらい売れました」

この当時としては斬新な宣伝活動を、仙台から沖縄まで全国行脚し、昭和28年から昭和45年頃まで続けられました。同時に、ラジオ、テレビを駆使したCM展開も実施し、オリエンタルの名が全国的に知られるようになったのです。

*「オリエンタルな夕べは」

昭和35年前後、であったろうか。私が小学生のころ、この唄は、ラジオから、よく流れてきていた。たしか、1回、30秒ていど。といっても、歌謡曲ではなく、コマーシャル・ソングとしてだから、当時この会社は、各ラジオ局に、相当なお金を、支払っていたことになるだろう。

もちろん、これらのことは、子供だった私には、よく判らないことだったが。カレーの宣伝であるらしいことは、わかった。なぜか、やや演歌調の、ねばっこい唄い方。歌い手は、30～40歳前後とおぼしき、若い女性。最近、選沢定年後、暇ができたので、ネットで調べてわかったが、この食品会社は、この当時、20人ていどの芸人を、全員、正社員として雇い入れ、宣伝用の車で、全国を回らせていたそうだ。

暑くなり始めた7月の、ある夕暮れ、小学校からの帰り道、坂道を降りかかった私の耳に、この唄が流れてきた。坂の近くの家の、ラジオから、だったらしい。そのとき、なぜか、友達のことか成績のことで、落ち込んでいたらしい私は、たちまち、この唄の世界に、ひきずりこまれた

。それは、食べ物に溢れた、穏やかで、楽園のような、やすらぎのある世界。強い憧れとともに、鼻をツーンと刺激する、芳しいカレーの香りが、漂ってくるようだった。

小学生だった私に、それは、かなり激しい、衝撃だった。いちど食べてみたい、と思いながら、その機会は、まったく訪れなかった。家が出るカレーは、キンケイやハウス、グリコなどが多く、オリエンタル（愛知県がメインのせい？）は、食べたことがなかった。そして、中学に進んだ頃には、もうこの宣伝の唄は、関東地方では、あまり流れなくなっていた。

そんなある日の、夕食にカレーがだされた。食べてみると、いつもと味が違う。色も、やや茶褐色が強い。母に聞くと、なんとオリエンタルのカレーだという。私は、しばし茫然としてしまった。何年も、長い間、憧れたカレー。しかし、いざ口にいれてみると、心はずまなかった。たくさんのスパイスを混ぜ合わせた、深いカレーの味が、素朴な子供の口にあわなかったのだ。ご糞屑のキンケイの、こってりとして深い、マイルドで、すこし黒ずんだ茶色のカレーが、私の口に、合っていたのだ。

最近になって、テレビの「名古屋はじめて物語」という特集のなかで、この会社の、このころの宣伝活動をみた。白黒の、古いフィルムには、意外な映像が、映っていた。宣伝車の前に、若い女性がカントリー・ウエスタン風のいでたちで立って、バンジョーを弾きながら、この唄を、軽やかに唄っていた。同じ唄だけれど、私の聴いた、演歌調バージョンは、どこに、行ったのだろうか。歌詞も、すこし違う気がする。

けれど、この特集によって、私の記憶はつながり、選択定年により、暇のできた私は、インターネットで、あれこれ、調べてみた。すると、この会社は、愛知県のF市に、いまでも健在だった。ただ、業容の規模は、予想の10分の1足らずで、この規模の会社が、どうして、あんなに、宣伝にお金をかけられたのか。あらたな、謎が、生まれてしまった。ともあれ、子供のときから約50年近くを経て、ずっと持ち続けた気になることが、いちおうは解決したのだった。

実績の十分にある方であるが、最後まで取り上げるのをためらった歌手である。その理由は、ウィキの経歴を一読すれば、分かって貰えることだろう。事件当時、すでに人気のピークは過ぎており、高校生以下（当時の）は、この事件によって彼のことを初めて知った、という人も多かったのでは。私は十分知っていたので、かなり衝撃を受けた。見たところ、平凡で謙虚で、人のよさそうなサラリーマン・タイプの人、といったイメージだったので。これは当時メディアを通しての、世間が彼に持っていた一般的イメージと、そう変わらないだろう。今回、すこしリサーチしてみて、返ってそのイメージが混迷してしまった。つまり、よく分からない所のある人、イコール、重罪を起こすかも知れない？タイプかも、という結論に誘われた、ということか。幅は狭いが、連想を想起させる力と奥行きがあり、唄はかなり上手い。歌謡曲歌手のイメージが強いが、プロとしての初期はロカビリー、ポップス系の歌手だったようだ。とまれ、この曲は大名曲である。小林旭の「さすらい」も名曲だが、勿論かなり趣の異なった異曲である。

泣いてくれるな 流れの星よ 可愛い瞳に よく似てる 思い出さすな さすらい者は 明日の命も ままならぬ/別れせつなや ひとりになって-----

克美 しげる（かつみ しげる 1937年12月 - ?）は、昭和時代に活躍した歌手。1975年から1976年にかけては『克美 茂』名義で活動。宮崎県宮崎市出身。下積み生活を経て、テレビアニメ『エイトマン』の主題歌を歌いブレイク。『さすらい』などのヒットを飛ばし流行歌手として活躍。

経歴

1956年 県立宮崎大宮高校に通いながら、仲間と音楽グループを結成し音楽活動に入る。その後大阪へ向かい、ジャズ喫茶で歌っていた水原弘に付き人にしてもらえるよう頼み込む。その願いは果たされなかったが、水原は有名なバンドなのであったから。リーダーを紹介するなど親身になってくれ、その親交はその後も長く続いた。

高校卒業後、神戸へ。関西で活躍していた“マウンテン・ボーイズ”のバンドボーイとなる。加入から1年後、最年少の彼はボーカルとなり人気者になっていた。この頃、「勝己しげる」という芸名を自らつけた。

1960年 日本放送協会（大阪）が主催したオーディションに合格。

1961年 バンド（“ロック・メッセンジャーズ”に改名）と共に東京に進出、芸名も「克美しげる」に改めた。ジャズ喫茶で歌っているところを東芝のディレクターにスカウトされ、ジョン・レイトンのカバー曲『霧の中のジョニー』でデビュー。

1963年 テレビアニメ『エイトマン』の同名主題歌を歌う。

1964年 歌謡曲路線に転じた『さすらい』が大ヒット。翌1965年と2年連続でNHK紅白歌合戦に出場。

1965年 『人形佐七捕物帳』（NHK総合）に豆六役でレギュラー出演。

1975年 思うようにヒットが出ず低迷が続いていた克美は、東芝EMIによるカムバックを賭けた“3000万円作戦”に乗ることとなり、芸名を「克美茂」に改名。『傷』で再デビューした。

1976年 愛人を殺害（克美茂愛人絞殺事件）。懲役10年の実刑判決が下った。

1983年 仮出所。かつてのバンド仲間で、彼のマネージャーでもあった大谷羊太郎の手助けもあり、音楽事務所を開く。その後再婚。カラオケ教室も開催。

1989年 覚醒剤を使用し覚せい剤取締法違反で逮捕。懲役8ヵ月の実刑判決を受ける。

1996年 31歳年下の現在の夫人と結婚（4回目）。その後、心臓病・脳梗塞・顔面麻痺等の疾病を患った。その後、体調も回復し、2000年代に入り、時折テレビ番組等のメディアに出演する様になる。

2007年12月 『蘇る封印歌謡 いったい歌は誰のものなのか』（三オブックス）の付録CDに、克美による新録音『さすらい』『おもいやり』『エイトマン』の3曲が収録され、発売。克美にとってはおよそ30年ぶりの、新しい音源の全国発売となった（この間、自主制作のカセットなどは発売）。およそ60ページ以上にわたり、彼の半生を克明にたどったインタビュー記事も掲載。出獄後、悔恨の念から写経を続ける他、地域の行事にも参加。

主な楽曲

霧の中のジョニー（ジョン・レイトンのカバー。40万枚の大ヒット）

夜に咲く花

ワンモアチャンス

片目のジャック

忘れぬジョニー

さいはての慕情

霧の中のロンリー・シティー

史上最大の作戦のマーチ（ミッチ・ミラー合唱団の映画『史上最大の作戦』テーマ曲のカバー）

悲しき渡り鳥

幸せの星をたずねて

夜霧のロンリー・メン

さすらいのマーチ

走れ大地を

メッカ

思い出のサンフランシスコ

エイトマン（2010年現在、克美の東芝・東芝EMI時代の音源の中で唯一CD化、ラジオ等でオンエアされることもある。）

北京の55日（ブラザーズ・フォアの同名映画テーマ曲のカバー。）

さすらい（60万枚の大ヒット。）

ナナ

テキサスの4人

くちづけ

流転ギター

悲恋道中

大阪エレジー

男じゃないか

雪山に消えたあいつ（元々は克美の持ち歌で、後にダーク・ダックスら複数のアーティストによって取り上げられた）

男の夕陽

俺たちマドロス

人形佐七

放浪哀歌

ああせつなき我が心（竹越ひろ子『東京流れもの』、および渡哲也『東京流れ者』と同じメロディーに、異なる歌詞をのせた楽曲。紅白歌合戦で歌われた）

さいはてに泣く

はてしなき恋（鈴木道明作詞・作曲）

渚のあなた（川内和子（康範の別名）作詞、中村八大作曲）

夕日の果てに

愛すればこそ

傷

おもいやり（名前を失念したが、先輩歌手の曲のリメイク版。逮捕後、親友であった黒木憲が歌いヒット）

この曲は、都はるみも、歌っている。競作なのか、カバーなのかは不明だが。都らしい味は出ているが、中村のほうは、潮の香りが漂い、全体的に荒々しい感じが出ている。力強い節回しと、低めのコブシが、印象的な歌手である。この30年、メディアで見かけないが、引退したのだろうか。かなりリサーチしたが、あまり情報は得られなかった。当時は、たまにテレビで見かけたり、ラジオで唄が流れていた。実力は十分ありながら、人気が出なかったのは、事実だが。ただ、この曲に関しては、都より、中村のほうが優れている、といえるであろう。

土佐の荒波 ヨイショと超える 男 土佐っぽ 度胸船 よさこい ほにこい 逢いに来い
海が---胸に ちらつく 面影よ ほにこい よさこい----

(収集プロフィール)

中村 佳代子、は演歌歌手。1964年デビュー。1970年前後に、かなり活躍した。
ほかに「北海育ち」(東芝)が中ヒットした。

主な曲

ひとり船

黒潮育ち

ザンブリ鷗

そのひと言が大事だよ

道はっぽん

荒海育ち (1969)

兄弟

1965年、発表。ラテン風のテイストで、大人の恋を唄った名曲。ラテンの素晴らしい歌唱力を持ったこの歌手が、この30年、メディアでほとんど見かけない、とっていたら、資料を読んで、その理由がはじめて氷解した。裁判などの結果、が出ている訳ではないので、ここには書けないけれど。一種の、慈善利用の詐欺だとか。事実であれば、残念だし、とても惜しい。1962年の紅白で歌った、ク・ク・ル・ク・ク・パロマは、重要文化財級の名曲であった。

唇よせれば なぜかしびれる 赤いグラスよ---帰らぬあの日よ 今宵ふたたび---

(収集プロフィール)

アイ・ジョージ(1933~)は日本の歌手、俳優、実業家。

略歴

1933年、香港生まれ。本名は石松譲治(いしまつ・じょうじ)。

父は石油会社の役員、母はスペイン系フィリピン人。外地生まれで、なおかつ混血児であったこともあり、戸籍上は1940年4月生まれ・父方の祖父母の第三子として届出がなされているそうである。三歳の頃に母を亡くす。父の仕事の都合で、香港、大連、上海、マニラを転々としながらも不自由ない裕福な幼少時代を過ごす。

1943年、父がバタビヤへ出征することになり、父方の祖母と大阪へ渡る。

1944年、香川県へ集団学童疎開。

1945年3月、大阪に一人残っていた祖母が空襲で亡くなったため、事実上孤児となり、長野県飯田市の果樹園へ引き取られる。父方の親類が長崎にいたそうだが、付き合いは無く、また8月9日の原爆投下によって全員亡くなったそうである。

1948年、消息不明だった父が南方での服役を経て復員。果樹園を出、父との同居を夢見ながら、大宮のパン屋に住み込みで働く。が、その3ヵ月後、刑務所生活で体が弱っていた父はあっけなく亡くなった。

それから6年間、パン屋・菓子屋・運送屋・ボクシング選手・競輪選手・ハンコ屋...さまざま職業を転々とする。

1953年、流し(米軍キャンプでも歌っていた)に転向していた頃、仲間に進められ、テイチクの歌手採用試験を受け合格し、黒田春夫という芸名で「裏街ながしうた」でデビューした。

第二の田端義夫というキャッチフレーズで歌謡曲歌手として売り出すテイチクと、ジャズ歌手として売っていきたいジョージの主張が食い違ったこと、レコードも売れなかったことから、数枚を吹き込んだだけで、テイチクを退社。再び、流しの歌手として日本各地を回る。

1959年12月、トリオ・ロス・パンチョスの日本公演の前座歌手となり、改めてアイ・ジョージとしてデビュー。同じ前座だった坂本スミ子共々大いに売り出す。そして再びテイチクとレコード契約を結ぶ。

紅白歌合戦には1960年から1971年まで12回連続出場。

1961年にはドドンパ・ブームを起こす。フィリピン起源のオフ・ビート・チャチャチャを、比

人バンドが持ち込み、それにジョージの仲間であるクラブアローのバンドマンが目をつけ、計画的に流行させたものである。ただ、三拍目を三連音符に換え、ドドンパと命名したのはジョージである。このことを考慮すると、アイジョージはドドンパの生みの親といっても過言ではない。

1963年、民音公演で「戦友」を反戦の意味合いで熱唱し、好評を博す。これによって当時の学生が反戦の象徴曲として歌い始め、やがて当時軍人だった世代も巻き込み、軍歌ブームが起きる。

外国曲を中心に歌っていたが、オリジナル曲では1961年には自作曲「硝子のジョニー」、1965年には純然たる歌謡曲「赤いグラス」をヒットさせている。特に「赤いグラス」はカラオケのデュエット曲の定番として長年親しまれている。

1963年10月8～10日、日本人初のカーネギー・ホール公演を果たす。当時は実力充分な一流歌手で無ければ、容易に舞台に立つことが出来ず、カーネギーの舞台に立つことは名誉だった。当時は大成功と報道されたが、実際のところ、内容は素晴らしかったが興行的には失敗に終わった。他にも1967年にはソ連公演を果たすなど、「世界の流し」として活躍した。またこの年には富豪令嬢と結婚、一女を儲けるも1976年離婚した。

この頃から実業家としての活動がさかんになり、沖縄海洋博を見込んで作ったレストラン、八丈島のホテル、六本木のメキシコ料理店などを経営するもすべて失敗に終り、10数億の借金を抱えることになった。

1987年、借金をようやく返し終えたこともあり、NECアベニューへ移籍し、本格的に歌手活動を再開するも、同年末に金銭トラブルを起こす。そのこともありメディア出演はさらに減っていき、1996年暮れテレビ東京の懐メロ番組に出演したのが現在テレビに出た最後になっている。あまりにも多い金銭トラブルのために日本での芸能活動が困難になったからではないかと一部では言われている。

1998年頃、永六輔がジョージを探すが、見つけ出すことは出来なかった。友人であるジョージ川口や坂本スミ子のもとには今も時折電話がかかってくることはあるが、連絡先を聞くと口ごもるという。

2004年末、週刊ポストに、『世界規模のチャリティCD製作を謳い集めた金2億5000万の用途不明』という見出しの記事が出た。その記事によれば、ジョージが集めた金は20億以上であるが、その計画が1990年頃立ち上げた計画が一向に進まない上、調査の結果進展した痕跡も無いことから不信感を示し、告訴を検討している実業家が多数いるという記事だった。（2億5000万は告発した実業家の投資額）そのチャリティCDは、ジョージの自作曲をクインシー・ジョーンズ、マイケル・ジャクソン、マライア・キャリー等も参加という壮大な計画で、世界規模で300億の売り上げを見込んでいるとのこと。

当時マイアミ滞在中であったジョージ本人の話では、「彼ら（スポンサーの実業家たち）とは製作過程でボタンの掛け違いが生じてしまった。(CDは)遅れ遅れではあるが来春できる。大物プロデューサーは集まって来ているし、ビックスターとも多数接触してる。参加するのは誰と言われても、いい方向でやっているとしか言えない。レコード会社との交渉はこれからだ。(自身の)年は年だが健康そのもの、悪いところはまったく無く、くたばる気がまったくしない。このプ

プロジェクトは石にかじりついてでも仕上げる」とのことであるが、2007年現在、完成したというニュースは伝わってはいない。

* 語録

自分しか信用しない人間が最も信用できる。

ぼくはいつも「今歌っている歌」が一番好き。

人生には何事も演出が必要。

相手の可能性を信じるからこそ、遠慮会釈無く怒鳴るのだ。

ぼくは日本人の魂の中にある素晴らしい歌を、現代のリズムに乗せて歌いたい。「ジス・イズ・日本人」「ジス・イズ・アイジョージ」と歌いたい。それが僕の夢だ。

代表曲／持ち歌

ラ・マラゲーニャ

硝子のジョニー

城ヶ島の雨

ラ・バンバ

キサス・キサス

ベサメ・ムーチョ

赤いグラス (共唱・志摩 ちなみ)

北国の海 (東日本フェリーCM曲)

* 演歌、ムード歌謡、ラテン、ポピュラー、民謡等幅広いジャンルの歌を類稀なる歌唱力で歌い上げるその姿は圧巻であった。さらに、この時代の人には珍しく、外国語の発音が完璧である。これは香港、上海、大連など外地で育ったことも関係するだろうが、現在でもここまで完璧な発音で歌う日本人歌手はまずいない。

私が中学生だったころ、この歌手は、当時の白黒テレビによく出ていた。かなりの、お金をかけてのプロモーション（当時は、売り出し中、といった）、と感じられた。まずまずの容姿と、そう上手くはないが透き通るような歌唱。この声は、天からのプレゼントといってよい、柔らかで、さりげない哀愁を秘めた、ハスキーな美声。彼のデビュー曲は、雑誌「女学生の友」の人気連載小説（あるいは漫画）の、主人公（同名の安達明）の世界を歌謡曲化したもの、というフレコミだった。作者の思い描く安達明が、歌手として選ばれた「安達明」とぴったりだった、というエピソードが流されていた。そして、その後数年活躍していたが、ある時期から、ぱったりとメディアに出なくなった。特にスキャンダルはなかったはずだが。私は、安達が売れなくなって、ドサ回りでもしているのだろうと思っていた。引退した、という情報が、なぜか大衆むけに明確に報告されなかったのだ。この当時の大ヒットを持つ歌手は、スキャンダルさえなければ、ふつう10年以上、羽振りよく暮らせるというのが、常識だったので。とまれ、この歌はなかなかいい曲げある。ペギー葉山の学生時代の世界を、日本的な情緒と音階で包んだような。

（作詞 北村公一 作曲 越部信義）

うすむらさきの 藤棚の下で歌った アベ・マリア 澄んだひとみが美しく なぜか心に残ってる 君はやさしい---

（収集プロフィール）

安達 明（あだち あきら、1948年9月～2011年5月）日本の歌手。福岡県北九州市八幡出身。恩師である遠藤実作品で1964年5月「潮風を待つ少女」にてデビューし、続いて8月に発売された2作目の「女学生」が大ヒットを飛ばした。女学生のアイドルとして人気爆発したが、人気絶頂でありながら、デビューから3年で芸能界を引退。所属していた日本コロムビアでは、未発表曲を含み34曲が録音された。引退後は銀座のスナック等で弾き語りをしていた。また、しばしばテレビ出演し、歌を披露していたが、2011年5月20日に亡くなった。62歳没。

主な曲

潮風を待つ少女

海の虹

女学生

夕焼けの丘

友情

赤いカンナが咲いていた

涙

白樺に立つ少女

春を待つ少女

エミーの肖像

僕のカーネーション

明日と握手

学園のハムレット
君の涙を忘れない
銀座の少女
父母よ
真白き富士の根（七里ヶ浜の哀歌）
昭和少年ぶし
さよならは美しく
さんざしの花咲けば
夕焼け雲と母とぼく
初恋
コバルトの海
十七才のブルース
風の町かど
涙のむこうに
夕顔の人
蒼いカシオペア
仲間に会うまで
悲恋
あの娘の名前はしあわせくん
僕の両手にさあおいで
恋の貝がら
君がいなければ

若いながらかなりな歌唱力を、持っていたと思う。売り出し中のころは、よくテレビで見かけた。人気も、かなりあったと思う。私は、小川のマイルドながら、ちょっと捻ったような、独特の節回しに惹かれた。容姿も、素朴な雰囲気笑顔の可愛い人、といった感じ。とって、特にファンというわけではなく、私は自分自身の危うい生存競争に、ただ追われていた。そうして、あまりテレビを見る時間もなくなり、3、4年後に、気づくと小川はメディアから消えていた。本格的な演歌に進んでも、結果を出せる実力があっただけに、惜しい歌手だったと思う。

(詞 石坂まさお 曲 城賀イサム)

雨の匂いが十九のこの胸濡らす 白い扉にあなたを想うの 夜の鏡に愛を問いかけ 一人涙をみつめて泣いた きっときっとまた---

(収集プロフィール)

小川 順子 (おがわ じゅんこ、1957年1月～) は、日本の元演歌・アイドル歌手。広島県呉市仁方町出身。

略歴

父親は瀬戸内海航路の船長。中学時代は器械体操で県大会入賞。順心女子学園高校在学中の1975年4月、徳間音工から『夜の訪問者』でデビュー。軽いハスキーな声を回すようにして歌う独得の歌唱が受け、同曲は大ヒットした。続く『男の世界』もまずまずのヒット。同年第17回日本レコード大賞他、多くの新人賞を受賞した。この年は細川たかし、岩崎宏美、片平なぎさ、太田裕美とのレコード大賞最優秀新人賞争いであった。当時は"第二の藤圭子"といわれ、自身も本格的な演歌を望んでいた。しかし会社の方針で正統派の演歌を歌わないまま、その後はヒットに恵まれず、3年後の1978年3月をもって芸能界を引退した。当時のマスコミ発表では、母親が病気で倒れて看病をするため、との説明だった。医師と結婚したのは引退後と思われる。少し先輩となる浅田美代子と仲が良く、現在も浅田の話に時折名前が出る。小川の娘がニューヨークの大学を卒業した2007年には、浅田は小川と一緒に卒業式に参加したという。(はなまるマーケット、2007年8月より)

シングル

夜の訪問者 c/w 恋はひとりぼっち (1975年4月)

男の世界 c/w さみしい夜の出来事 (1975年9月)

恋もあなたもさようなら c/w 愛はうしろ姿 (1976年2月)

過ち c/w 忘却旅行 (1976年5月)

お返事下さい c/w 煙草のけむり (1976年11月)

夕陽 c/w 誰も悪くないのに (1976年12月)

(フジテレビ系連続ドラマ「刑事物語・星空に撃て!」主題歌)

あたしにそっくり c/w 好きなあなたと暮りたい (1977年5月)

どうするヨコハマ c/w 酔いどれ (1977年9月)

アルバム

演歌だ18歳

夜の訪問者

涙色の世界・小川順子オリジナルファースト

高石 かつ枝

私が若かったころ、かなり活躍した歌手であるが、ある苦いスキャンダルで、フェードアウトしていった方。唄は、音楽的には、ほのかな酸味をおびた美しい高音を駆使できる、かなり上手い歌手だった。が、歌謡曲の歌手としては、味わいや個性にすこし乏しかった、といえるだろう。そのため、活躍中も、一定の人気はあったが、大きくブレイクすることはなかった。容姿も、歌手としては、まあまあだったし、私は結構ファンだったが、多数の曲を出しているわりに、これといった、後世に残すべきオリジナル作品は、記憶にない。わづかに「林檎の花咲く町」「悲しみのタンゴ」と、下記の「南国エレジー」が、佳曲とっていいだろう。

（谷元義男作詞 牟田富夫作曲 1965）

濡れた黒髪 瞳のちゅらさ 娘 愛しや 島育ち 赤いデイゴの 花影で 遠い面影 また
夢に-----

（収集プロフィール）

高石 かつ枝（たかいし かつえ、1946年（昭和21年）～ ）は昭和期の歌手。

概要

1960年代を代表する青春歌謡歌手の一人であるが活動期間は1962年（昭和37年）～1968年（昭和43年）と短い。

高石のリリースした作品には、レコード会社所属時期によって特徴が。コロムビア時代は戦前の歌謡曲のカバーと抒情歌的な作品、クラウン時代は青春歌謡、テイチク移籍後は脱アイドル・大人路線、といった傾向である。

ただ、全期間を通じて、民謡、演歌、コミカルソング、タンゴ調の曲、青春歌謡、抒情歌等、ジャンルが多岐に亘って総花的であり、このことが、結果としてファン層を絞りきれなかった一因にもなっている。全国の地名をモチーフにした所謂”ご当地ソング”が多いのも、そうしたファン層見極めの試行錯誤の一つであったと考えられる。

高石は、一年余り遅れてデビューした本間千代子とよく対比される。だが、本業が東映女優でもあった本間が、早くからアイドル路線を確立させ若い男性中心に支持を得ていたのに対し、高石は戦前歌謡を知る年齢層をターゲットにスタートしながら、結果的に対象を見極めきれずに終わった。

経歴

神奈川県横須賀市出身。

幼少の頃より童謡歌手としてテイチクで活躍し、1960年（昭和35年）より万城目正歌謡音楽院で本格的に歌謡曲を勉強した（ちなみに、万城目正は、高石のデビュー曲「旅の夜風」の作曲者である）。また、小学校5年生のとき、ある服飾雑誌の少女ファッション・モデルに応募して合格、このときの合格者の中に、小学校4年生だった和泉雅子がいたという。

1962年（昭和37年）、松竹「愛染かつら」の再映画化に際し、ヒロインの名前をとった歌手「高石かつ枝」募集に合格。同映画主題歌「旅の夜風」で日本コロムビアからデビュー。この後、同曲でコンビを組んだ藤原良と数枚のデュエット曲をリリース。

1963年（昭和38年）、白川由美主演の東宝映画「林檎の花咲く町」に女子高校生の役で出演し、人気を確立した。彼女が歌う同名の主題歌もヒットし、年末の第14回NHK紅白歌合戦に初出場した。この年、華々しくデビューした舟木一夫が学生服で出場、高石かつ枝もセーラー服で出場して話題になった。

この年、十和田湖の乙女の像の完成にちなんで作られた詩人・佐藤春夫による「湖畔の乙女」のレコード化が10年目にして企画され、高石によりレコーディングされた。佐藤春夫自ら指導するなど、コロムビアも力を入れた企画であったが、高石のクラウン移籍問題で中絶。その後、「湖畔の乙女」は、本間千代子によりリリースされた。

1964年（昭和39年）2月、北島三郎、小林旭、守屋浩らとともに新興会社・日本クラウンに引き抜かれて移籍。日本クラウン在籍の1年余の期間に16枚のシングルをリリースした。これは、同年デビューした西郷輝彦を上回る。だが、1965年6月、当時政財界をゆるがせた疑獄事件吹原産業事件の渦中にあった吹原社長から自宅の提供や宝石の贈与、レコード5000枚の買い取りなどを受けていたことが発覚した。6月23日、日本クラウンは契約破棄を通告し、高石は一時芸能界から追放された。

その後、テイチクに移り1966年（昭和41年）1月から1968年（昭和43年）3月にかけて十数枚のシングルをリリースしたが、目覚ましいヒットには恵まれなかった。1969年（昭和44年）、設備機器メーカー（現株式会社チャンピオン）の御曹司だった伊藤佑吉と結婚、芸能界を引退した。伊藤はプロ野球の王貞治の早稲田実業時代の同級生で、彼女のショーにゲスト出演した王の仲介があったといわれている。

長いブランクを経て、1980年（昭和55年）に「女絵」を、また、1984年（昭和59年）に中国残留孤児を歌った「風の子守唄」をコロムビアから出している。

その後

芸能活動中断中も、萩本欽一司会の「オールスター家族対抗歌合戦」（フジテレビ系列 日曜20：00～）など、いくつかの番組にゲスト出演している。また、懐メロ番組にも何度か出演し、「旅の夜風」を霧島昇とデュエット（1979年7月「夏の紅白大行進」、1982年12月「年忘れにっぽんの歌」など）。

2010年9月に日本コロムビアから、「青春スター ～ときめきのヒロイン～ 本間千代子・高石かつ枝・高田美和」が発売された。高石かつ枝の作品はコロムビア時代の40曲が収録されており、彼女初の本格CD-BOXといえる。今回のCDには、未発表作品7曲が録音後47年目にして初公開されている。

*引退後の1980年（昭和55年）と1984年（昭和59年）に各シングル盤を出しているが、何れも単発的で目立った芸能活動は行っていない。

*曲調や歌詞は演歌風なるも、高石の歌唱法には演歌独特の「小節（こぶし）」や「ビブラート」といった手法はさほど用いられず、一般の演歌歌手のイメージとはやや異なっている。

*特に、奄美・沖縄など琉球地方のものが多。その他、「花の決死隊」の樺太、「ああロマンス夢の国」の三重など。

*特にコロムビア時代は「旅の夜風」「純情の丘」などリバイバル曲のカバーが多かった。

*1965年（昭和40年）6月24付朝日新聞（夕刊）によると、彼女の父、山崎前豊氏がクラウン社に呼び出され事情を説明するも受け入れられず、機会を見て真相を一般に公表したいと言ったという。そして、同記事には、山崎氏は「親としての責任もあり、いい方へ子供を指導してやりたい。」と語り、又、高石は、出演していたテレビ番組の共演者たちから激励され、そうした人たちの力も借りて芸の道に励みたいと言った旨の記述もある。

*7曲とも全て1963年に録音されたもので藤原良とのデュエット「誰かと誰かの歌」を除き高石のソロ。

「曲名」（作詞/作曲/編曲）（録音日）の順

「誰かと誰かの歌」（関沢進一/戸塚延夫/松尾健司）（1月23日）

「私は恋をしたのかしら」/「知らない街」（松原一郎/遠藤実/安藤実親）（2月5日）

「ないしょの街角」（西沢爽/万城目正/山田宗次郎）（11月11日）

「青空の天使」（西条八十/万城目正/山田宗次郎）（11月13日）

「まごころの小箱」/「春の乙女」（星野哲郎/古賀政男/佐伯亮）（12月3日）

関連文献

平凡出版 『週刊平凡 昭和40年7月9日号』クラウンをクビになった18歳の純情歌手 真相と心境
集英社 『週刊明星 昭和40年7月11日号』特報 高石かつ枝の身のふり方

主な曲

「旅の夜風」「悲しき子守唄」（1962年3月、コロムビア）デュエット：藤原良（A面） 原曲は霧島昇、ミスコロムビア（1938年）

「愛染夜曲」「愛染草紙」（1962年6月、コロムビア）デュエット：藤原良

「純情の丘」（1963年1月、コロムビア）A面原曲は二葉あき子（1939）

「林檎の花咲く町」「月の十和田湖」（1963年2月、コロムビア）

「私は言うの」（1963年8月、コロムビア）A面は高木たかし「湖畔に咲いた白い花」

「永良部百合の花」「島はたのしや」（1963年8月、コロムビア）

「悲しみのタンゴ」「小窓に咲く花」（1963年10月、コロムビア）

日本クラウンへ移籍

「花の決死隊」「おとめの像」（1964年3月、クラウン）

「夢見るころ」「箱根山」（1964年3月、クラウン）

「すずらんはあの時の花」「高原の人」（1964年12月、クラウン）

「九十九島恋しや」（1965年1月、クラウン） A面は高木たかし「君の町」

「南国エレジー」「えらぶ小唄」（1965年2月、クラウン）

「乙女の園よさようなら」「お姉さんママ」（1965年3月、クラウン）

*吹原事件でクラウンを解雇となる

「君の名を呼ぶ」「丘の上の白い校舎」（1965年11月、テイチク）

「ここに花咲く」（1966年、テイチク）デュエット：浜田光夫 B面は浜田光夫「急げ巡航船」

「涙を母校に」「鳩笛吹けば」（1967年4月、テイチク）デュエット：藤田功（A面）

「東京駅でお別れしましょ」「さよなら栈橋」（1967年7月、テイチク）B面は日活映画「爆破3

秒前」挿入歌

「新大阪音頭」 「そやかて好きやねん」 (1967年11月、テイチク)

「車いすの詩」 「知らなかったわ」 (1968年3月、テイチク)

*結婚により引退

「女絵」 「返してあげる」 (1980年9月、コロムビア)

「風の子守唄」 「まごころ」 (1984年8月、コロムビア)

映画

林檎の花咲く町 (1963年、東宝) - 女子高生「池端真由美」

「あの人はいま」にも出てこないのに、いまの所、消息はつかめていない。かなり、調べたのだが。岩城徳栄などと、ほぼ同時期に活躍。元祖新宿系歌謡シンガー、と言われている。代表曲

「新宿ダダ」は、昭和歌謡史に輝く、名曲である。「ダダッ！！ダダッ！！ダダァ！」とシャウトされる、最初のワンフレーズで、その世界に引き込まれる。世界最大の享楽シティ新宿と、退廃的なダダイズム（20世紀初頭～中期にフランスを中心に巻き起こった反体制的芸術運動）と、大衆的歌謡メロディーの融合とアンバランス。かなり、意味深である。もしくは、ただ単に新宿生まれのワガママ娘（＝ダダッ子）？かなりの歌唱力があり、OL風の容姿も中の上で、ある程度の人気は出たが、なぜか、徐々にフェードアウトしていった。この曲は、わづかではあるが、一般に知られている、唯一の曲である。唄いやすく、メロディーも万人むきで、宇多田ヒカル、浜崎あゆみ、徳永英明、絢香、などに、ぜひリメイクして欲しい曲である。

歌謡曲に、なぜか、打ち壊し・既成概念の破壊という、難解な社会的・芸術的概念を、導入したわけだが、その成否はともあれ、私は、楽しくポップに受け止めた。

（詞・曲 石坂 まさお 1977）

ダダ ダダ ダダ ダダ 新宿生まれで 新宿育ち まかせておきなよ 世間のことは さよなら 母ちゃん さよなら 父ちゃん 私は私で 気ままに 生きていく-----

（収集プロフィール）

山川 ユキ（やまかわ ゆき、19xx～）

主な曲

街角の九月

夜更けの慕情

ウラトビスケ'78

不確実性の時代

夜のろくでなし

真夜中ロック （詞：石坂まさお 曲：小山恭弘）

ケリ （詞：伊藤アキラ 曲：川口真）

カメラのさくらや CM曲 （曲 小林 亜星）

岩城徳栄

1978年、発売。活躍の時期は、1980年前後の5、6年間。あまり知られているタレントではないし、すごい人気があったわけでもないが、いまでは、バラドルの元祖といわれている。ポップス系歌手としては、かなり唄もうまく、とくにこの曲は、心に残る。そして、レコードジャケットの写真には、もはやアンティークの香りさえ漂う。

*岩城徳栄（いわき とくえ、19XX～）ピーコの愛称で「独占！女の60分」レポーターで活躍。某情報番組での重大失言（明日、地震が来ます、などという）で番組降板、引退後結婚。ほかに「ダイナマイト」「秋物語」（詞 伊藤アキラ 曲 小田裕一郎）など。

「ダウン・タウン・ベイビー」

この街に来たなら どんな奴だって 挨拶においでよ 私のところへ 上手いコーヒーと-----

豊川 誕

35年前に、あのジャニーズから、孤児というキャッチで売り出された、稀なタレントとっていい。確かに、気の毒な「星めぐり」だが、その境遇からスターの座を掴んだのは、立派とっていい。その後、さえないスキャンダル（未払い、薬物、詐欺など）で、すっかり低迷し、忘れられてしまった豊川だが、「あの人は、いま」で、15年くらい前に見かけたことがある。あと、高島忠夫が司会の、彼が29歳のときのテレビの唄う映像。やや崩れてはいたが、なかなかハンサムで、スタイルも良く、普通人よりはまだオーラがあった。けして、うまいとは言い難いレベルの歌唱。いまは、ドサ回りでもしているのだろうか？けれど、この曲は、厳とした名曲である。リメイクは、嵐の、二宮か桜井が、キャラが合うだろう。

（詞 安井 かずみ 曲 筒美 京平）

やさしく身体を離して ごめんなさいネと言った どんなつもり---ああ 誰か 誰か つなぎとめて 愛して

（プロフィール）

豊川 誕（とよかわ じょう、1958～ ）は、1970年代に活躍した元・ジャニーズ事務所所属のアイドル・歌手である。養護施設の出身という事で話題に。

所属 ジャニーズ事務所 → ?（「豊川ジョー」時代） → 再びジャニーズ事務所 → ロープロダクション（シングル『愛したら最後』から） → フレンズ・ジェイティ・P（1990年からロープロと掛け持ちで所属） → 現在フリー

参加バンド

ジョーズ（ジャニーズ時代のステージ用バンド）

オール・ジャパン・デビル・バンド（1980年）

ジョー&メサイア（1982年）

MESSIAH（メサイア）（1989年）

豊川誕とケンちゃんバンド（1990年）

*1980年代から様々な形でバンド活動を展開。様々な企業のパーティーなどで余興演奏をし、その会社の社員たちを楽しませる「パーティーバンド」としての活動が主。

来歴

1961年11月、推定3歳時に、兵庫県姫路市の大手前公園横の並木の下のベンチで、父親から「ここで待ってなさい」と言われたまま置き去りに。言われた通りずっと独りで待ち続けていたが、夜になって真向かいのスナックのママが異変に気付いて警察に通報。無事に保護された。発見当初は自分の名前を「ヒロ」と名乗っていたが。

発見されてからは、姫路市城北新町の養護施設『社会福祉法人 パルコミュニティハウス 信和学園』で過ごし、最寄りの市立城北小学校を卒業。当時は既に、身寄りのない天涯孤独の子供が入所する施設というよりは、親が何らかの事情で扶養能力がない為に、入所する子供が多かった。そういう子供達は戸籍も分かっていて親の面会もあるが、豊川の場合はそのどちらも無く、相当寂しい思いをしながら育った。当時のお小遣いは月に100円で、日曜日にアイスクリームやキャラメ

ルを買っていた。豊川は2007年に、この信和学園へ実に約32年ぶりとなる帰郷を果たしている。中学からは兵庫県相生市の家に里子としてもらわれ、相生市立双葉中学校、及び英語塾へと通った。そして、中学卒業と同時に家を出て、一人で生きていく事を選んだ。

尚、雑誌『セブンティーン』の1977年3月号にて、この里親と3年ぶりになる涙の再会を果たす。母親がクリスチャンで、その影響を受けた豊川自身もまた、21歳の時に洗礼を受けた。父親の方は2006年末に逝去。豊川を捨てた実の両親については、「私が親です」と名乗る偽者が次々と現れた。そして、高島忠夫司会のテレビ番組で本当の親を捜索する企画も行われたが、それでも結局見つかる事はなかった。豊川はデビュー当時の雑誌記事でこう答えている。「もう実の親には会いたいとは思いません。でも、自分が本当は何という名前でも何歳なのか、それさえわかれば、僕は普通の人間に戻れると思う。それだけが気がかりです。」と。

高校は、昼は神戸市須磨区の関西鉄道学園（全寮制）、夜は神戸市長田区の定時制高校、神戸市立大和田工業高校に通った。やがて関西鉄道学園を退学に追い込まれ、寮も出る事となった。以降は神戸の友人宅を転々と寝泊まりするようになるが、各友達の家にはせいぜい3～4日の連泊が限度で、時には須磨海岸にテントを張って夜を明かす事もあった。

1974年の夜間高校1年の夏休み、ゲイバーや、大阪市北区の阪急東通商店街の喫茶店『ヌウ』（現在はもう無い）にて、ウェイターのアルバイトを住み込みで開始。夜間高校はそのまま中退。同年10月からは、貯金を使って、大阪府守口の家賃6千円のアパートにて一人暮らしも始めた。家具が一つも無い3畳間だった。ところが、『ヌウ』でのアルバイト中、ジャニーズ事務所に繋がりを持つ男性にスカウトされる。そして、バッグ一つを抱えて1974年10月に深夜バスで上京。メリー喜多川に引き合わせて貰い、ジャニーズ事務所に入る事が決まる。アルバイトは2ヵ月半、アパートでの一人暮らしは、たったの17日間だった。

最初は本名の「本田孝」で『月刊明星』に登場。その後、豊川誕の芸名を貰い、上京してから僅か5ヶ月後の1975年3月、『汚れなき悪戯』でデビューを果たす。キャッチコピーは「うわさのジョー!!」だった。何のトレーニングもしないでデビューしたにも関わらず歌唱力に優れ、アイドル誌の表紙を山口百恵・片平なぎさ・岩崎宏美といったメンバーらとツーショットで飾ったり、『月刊明星』の1975年10月号の人気投票では1位になった程の人気があった。また、1975年10月の「第8回新宿音楽祭」や、その他の音楽祭では殆ど銅賞を受賞。しかし秋田県などの地方の音楽祭では金賞も受賞した。マルベル堂の「年代別ブロマイド売上ベスト10」にも、1975年と1976年の2年間ランクインした。最盛期には13グループもの親衛隊が存在し、ステージ用の応援コールも作られた。「L・O・V・E とよかわじょ〜」、「GO・GO・GO・GO レッツゴーじょ〜」など。この当時の豊川は体重が48kgしかなく、それまでは先輩の北公次しか出来なかった連続バック転やバック宙を、ステージで軽々とこなしていた。

1977年5月に出したシングル『白い面影』の歌詞が発端で、ジャニーズ事務所を離れる事になる。その歌詞とは、「親のない子は焼かないパンを喉に詰まらせ水を飲む」などのあまりにも悲惨に満ちた内容で、デビュー時からずっと続いていた「捨て子」「施設出身」という事を前面に押し出して、世間の同情を誘おうとする事務所側の戦略に、ついに我慢出来なくなってしまった。そして、5年契約だった所を約2年で、喧嘩別れの状態で事務所を退社。

1979年、20歳の時にメリー喜多川と和解し、一旦ジャニーズ事務所に戻る。本来ならば、このままジャニーズ事務所で順調に再スタートを切る予定だったが、ここに来てまたしても豊川は事務所を去る道を選んでしまう。

1981年1月には、クルースのディレクター・増井淑博が仕掛け人となり、トリオレコードからシングル『愛したら最後』をリリースした。

23歳の頃から、プロボクサー、プロバイクレーサー、更には車の国内A級ライセンスも取得し、マツダ・RX-7で筑波サーキットへ出場するなど様々な転身を図るが、いずれも長くは続かなかった。

1987年からは、笹川良一会長の会長付だった鈴木正文（世界38ヶ国に支部を持つ空手道場「日本正武館」の館長）に、可愛がられるようになった。そして鈴木が東京に来る際は、同行して運転をしたり秘書を務めた。その後、やはり3年間に渡りハワイで旅行会社『Friends Travel, Ltd.』を経営したり、日本でもイベント会社や芸能事務所を経営したりと、日本とハワイ間を往復しながら、多角経営を展開していた。この他にも、1980年代には六本木に『ダンシングマリア』というショーパブを開店。

1989年、豊川を含めた7人編成のバンド「MESSIAH」を結成。ここでも再びクリスチャンとしてのこだわりの“メシア”を引用。そして、自身が全曲の作詞作曲を手がけたLPレコードをインディーズでリリース。

1990年、芸能事務所『フレンズ・ジェイティ』を麻布十番に設立。社長を務めながら、自身もタレントとして所属。

現在はイベント関連の会社に勤務している。

人物・特徴

中学1年生の時には剣道で県大会に、2年生の時には器械体操でやはり県大会に出場するなど、子供の頃からとても運動神経には優れていた。

好きなアーティストは、キャロル、スージー・クアトロなど。この他、ジャズ、ソウル、R&B、ボサノバなどを愛聴。とてもおしゃべりで、明るく楽しい性格の持ち主。

交友関係

10代の頃は、同世代の演歌歌手・倉田つよしや、後に歌手デビューした青柳ひろみとよく遊んでいた。彼らとは現在も友人である。アイドル時代によく共演し、「日劇ウェスタンカーニバル」にも一緒に出演した仲であるあいざき進也とは、現在でも親しい。

1987年から、笹川良一会長の会長付だった鈴木正文（世界38ヶ国に支部を持つ空手道場「日本正武館」の館長）の一番弟子として豊川も日本正武館のネクタイを着け、延べ約3年間に渡り笹川会長の下に関った。

イベント会社をやっていた頃は、城みちる、松本ちえこ、伊藤咲子らをまとめて、様々なイベントに出演させていた。

作家・政治ジャーナリストの渡辺正次郎は、かつて豊川がカード詐欺で逮捕された時の身元引受人。

シングル

汚れなき悪戯 (1975・売上9.8万枚)

星めぐり (1975・最もヒットした曲。売上が30万枚を突破。)

メンソール・シガレット

白い面影 (1977)

私は、この歌手について、特にファンだった訳ではないが、芸名のユニークさと、突然の引退という、劇的な展開に驚き、いまでも鮮明な記憶となっている。テレビにもかなり出ていたらしいが、私は仕事に身心をすり減らしていた時期なので、10回程度しか見ていない。当時の雑誌などによると、業界の裏の汚さや、人間関係に疲れて、最後の頃はノイローゼ気味だったという。私は、引退という英断は、正しかったと思う。唄は、かなり上手い、とっていい。北島三郎や、鳥羽一郎の世界を、唄える歌手だったのは確かだ。息つきや音程、コブシなどの、細部のテクニックに雑な面もあるが。いわゆる、強引に曲の世界に持っていくタイプだ。

(ウィキペディアより)

段田 男（だんだ だん、1967- ）は、日本の元演歌歌手。愛知県みよし市（旧・三好町）出身。現在は芸能界を引退している。

来歴

愛知県立東郷高等学校在籍中から地元名古屋のローカル番組に出場し、高校卒業後に作曲家・市川昭介に入門。1986年、日本コロムビアよりシングル『玄界灘』でデビュー。新人離れした抜群の歌唱力のみならず、そのインパクトの強い芸名や、角刈りの男らしい風貌などと相まって、瞬く間に人気演歌歌手の仲間入りを果たした。また当時のフジテレビの人気番組だった『タヤけニヤンニヤン』にも準レギュラー格で出演。将来を有望視されていたが、2枚のシングルと1枚のアルバムを発表した後、1988年頃に芸能界を突如引退。引退後は地元に戻り家業である大工となる。現在は大工をする傍ら、音声多重DVDカラオケのレコーディングなども行っている。また、2007、2009、2010には愛知県安城市の七夕まつりのステージに出演し、数曲を披露した。その他、本名で地元の介護施設等で歌を披露したりする活動をしている。

名古屋市緑区のカラオケBOXなど他で本名のフカヤ歌謡教室を開校している。

作曲家市川昭介の内弟子を経て、ヒット曲「玄界灘」で知られる歌手「段田男」が、あなたの歌の可能性を引き出します。

ディスコグラフィー [\[編集\]](#)

シングル [\[編集\]](#)

- 『玄界灘』（作詞：吉田旺、作曲：市川昭介） - 1986年3月21日
- 『男華』（作詞：吉田旺、作曲：市川昭介） - 1987年2月21日

*「華の昭和名歌150選」\1、155が、文芸社から発売中。古書店、ネットも可。

*パブで電子書籍「20世紀の大仙人。」を刊行しました。無料なので、ぜひ一読を。

*お知らせ

演歌・歌謡曲系若手（インディーズ系・P版での活動者を含む）歌手たちをメインに、男女30名ずつを選んで「平成。グランプス30」を、「華の平成名歌」に登録。また「ネオ・ルネッサン

ス50」も新設。活動へのサポートに、どんどんご使用下さい。

*期待される「平成&平成メンズ。G30」。ジャンル等、幅広く選択しました。

*「平成。グリップス30メンズ」

竹島宏・ジェロ・おおい大輔・鈴木一平・松田敏来・北川大介・山内恵介・清水翔太・木山裕作
・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・
秋岡秀治・山川豊・野上こうじ・黒川真一郎・大地誠・松原健之・三田りょう・秋川雅史・錦
織健・宇都宮さだし・三山ひろし・坂井一郎・西方裕之

*「平成。グリップス30」

山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴
・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・山本みゆき・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・大石
まどか・永井裕子・みずき舞・浅田あつこ・椎名佐千子・かつき奈々・南かなこ・山口かおる・
小桜舞子・中島ゆきこ・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子

*ネオ・ルネッサンス50

真木袖布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・
あさみちゆき・服部浩子・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川
寿美・谷本知美・葵かを里・

加門亮・池田暉郎・光岡洋・加川明・加山こうじ・渡辺要・クレイジーケンバンド・加納ひろし
・北岡ひろし・小金沢昇司・鈴木雅之・半田浩二・永井龍雲・木原たけし・

当時、私はこの歌手を、ときどき見かけたと思う。その年頃の娘にしては、相当な実力があつたし、この曲は特に印象に残っている。実力もヒット曲もありながら、周囲の大人やスタッフが、育て方を間違えて、駄目にしてしまった歌手の典型、と言えるだろう。時代遅れのような、えぐいファッションも、マイナスに響いたのかも。この次の「おじさんルンバ」は、不評だったのかほぼヒットしなかったが、私は割と面白いと思った。凡作という方が多いのは、事実だが。その後も、何年かメディアでときどき見かけたが、やがて姿を消してしまった。未確認ではあるが、あるブログによると、現在は主婦として暮らしているようだ。

(詞：石坂まさを 曲：杉本真人 1976)

おじさん 好きならば 夢の中 いま おじさん どこまでも連れてって いま きらめく恋の夜 ゆれてる-----

(収集プロフィール)

桜 たまこ (19XX～) 1970代後半に、活動した歌手。

略歴

* 1976年「美しき独占」でデビュー。ヒットはしなかったが、かなりの頻度で聴くことが出来た。歌手がゲストで出る番組が、当時はまだ多かったからだろう。テレビでも、ときどき見ることがあり、鋭い表情、豊かな声量と、有望新人を思わせた。次の「東京娘」は、デビュー曲が、アイドルポップスだったのに、わかりやすいドドンパで、中高年層を狙った感じで、表情も笑顔に。かなりなヒットとなり、TV出演も増えて、知名度はかなりあった。半年後、「おじさんルンバ」が出る。普通は、満を持しての傑作を持ってきて、代表曲を獲得し、スターダムに乗るチャンスだが、「東京娘」の「おじさん」のフレーズを引きずった凡作。デビュー時の、実力派のオーラが消えた。そして、2、3年後に引退。(その時期にも、多少の知名度はあり、引退が確認できる状態。)

* 「ドドンパ」は、日本で作られたリズムといわれ、渡辺マリの「東京ドドンパ娘」と北原謙二の「若い二人」が、代表曲である。都々逸+ルンバが、定説。「東京娘」は「東京ドドンパ娘」の姉妹編的扱いで、「ドドンパ」ブームの再来と、かなり話題になった。

1985年頃の、ある大手新聞のインタビューで、祭はひとつの悩みを語っていた。それは、曲ごとに、調子が大きく変わってしまうので、どう唄い、どう演じて行けばいいのか、自分でも混乱してしまうのだ、と。それは、まさにその通りで、せっかく勇壮な「命船」で、正統派演歌ファンの心を掴みかけたのに、その後、しっとり演歌に。そして、まもなく「御輿」というまさに、威勢のいい明るい祭り唄。インタビューは、この辺りの時期だったが、その後も、しっとり演歌に戻ったり、威勢よくなったり。これでは、イメージがめまぐるしく変転してしまって、きちんとしたファンは付かない。十分な力量をもちながら、このような不運で、祭はいまだに、一流歌手への道に乗れないでいる。他にも、似たようなパターンの歌手は、4、5人知っているが、祭は特に惜しい歌手のひとりである。ぜひ、リセットして、出直しして欲しい。「よさこい唄」「女黒田節」「白樺に涙あり」「冰雪原野」などのリメイクが、その声質に向いているだろう。

「命船」(詞・曲 遠藤実)

海の男ならひとりの女に泣くななげくなヨ---泣いたら 負けだよ 両手ふれふれ 花港 ソレキ
タドッコイシヨ---

(ウィキペディアより)

祭 小春(1968～)は、演歌歌手。福岡県生れ。

略歴

1984年11月、『命船』にてデビュー(ソニー)

日本有線大賞 新人賞受賞

*祭は、わりと買っています。デビューの「命船」はパンチのある歌い方が気持ち良くて、これからどうなるんだろうと楽しみにしていた。

演歌スタイルのヴォーカルをしっかりと聞かせる祭小春だが、どこかで新人類演歌に変転するのでは?と妙に期待させつつ既成の演歌スタイルで押し通してしまう。どこかでその若さ故のプツンがあると、来た～!と思えるだろうと予感させてくれる。

*「博多しぐれ」が、まずまずヒットした。パンチのきいた男歌というイメージを変えて、しっとりと耐える女の恋心をうたって、それがよかったのかね。カラオケを支えているおばさん向きの歌なのかもしれない。今後この方向でゆくのでしょうか。

*喉を絞ったうなり声などを取り入れながら、シリアスな内容からコミカルな歌まで、けっこう幅広い芸を聴かせてくれる。

*哀愁を帯びた声で切々と歌う曲から、張った声とパワーでぐいぐいと押していく従来の小春節までバラエティ豊かに。スケールが大きい演歌と博多シリーズは安心して聴くことができる。

*女性らしいかわいらしい声は健在、優しさのある哀感が出てきた。従来の博多もののシリーズばかりではなく、幅広いテーマの歌まで自分のものにしてきたようだ。

*勇壮なコブシまわしの男唄と女の運命(さだめ)の女唄、そして陽気な祭り唄を楽しめる。なかでも男の応援歌は、聴いてるこちらにも力が入るほど。ないものねだりだが、「命船」のような八方

破れを感じさせる楽曲が、もっとほしい。

シングル

命船

女のまつり

地球をころがせ

さらば故郷三度笠

博多舟

博多しぐれ

浪花の花道

御輿（みこし）

潮来なさけ

華の昭和名歌Ⅰ～Ⅸ・華の平成名歌Ⅰ～Ⅴで、取り上げる予定のアーティストを、下記に。ただし、収録上の都合で、選択できない場合もあります。

現在、とても頑張っている歌手たち。けれど、彼等が、輝いていられる時間は、短く、儚いのが、普通です。時の流れは速く、テクノロジーは日進月歩、大衆の好みも、2、3年で、大きく変わっていく。それらを、上手く乗り越えた歌手だけが、残っていくのです。

*「華の昭和名歌150選」1、155が、文芸社から発売中。古書店、ネットも可。

*お知らせ

演歌・歌謡曲系若手（インディーズ系・P版での活動者を含む）歌手たちをメインに、男女30名ずつを選んで「平成。グリップス30」を、「華の平成名歌」に登録。また「ネオ・ルネッサンス21世紀」も併設。メジャー等へのサポートに、どんどんご使用下さい。

*「平成&平成メンズ。G30」。ジャンル等、幅広く選択しました。

*「平成。グリップス30メンズ」

竹島宏・ジェロ・岡大介・鈴木一平・松田敏来・北川大介・山内恵介・清水翔太・木山裕作・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・山川豊・黒川真一郎・大地誠・松原健之・三田りょう・秋川雅史・錦織健・宇都宮さだし・三山ひろし・坂井一郎・福田こうへい・東京大衆歌謡楽団・こおり健太

*「平成。グリップス30」

山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・椎名佐千子・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・松川美樹・永井裕子・みずき舞・たむらばん・菊池まどか・かつき奈々・南かなこ・山口かおる・小桜舞子・瀬口悠希・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子

*ネオ・ルネッサンス21世紀

真木柚布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・あさみちゆき・服部浩子・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川寿美・谷本知美・サエラ・中島ゆきこ・大石まどか・浅田あつこ・椎名佐千子・山本みゆき・秋岡秀治・加門亮・池田暉郎・光岡洋・加川明・加山こうじ・渡辺要・クレイジーケンバンド・加納ひろし・北岡ひろし・小金沢昇司・鈴木雅之・半田浩二・永井龍雲・木原たけし・西方裕之・三浦わたる・野上こうじ・

収録予定歌手リスト

野口五郎・布施明・氷川きよし・和田アキ子・松田聖子・真木柚布子・三代沙也可・水沢明美・夏木綾子・岡ゆう子・北野まち子・秋山涼子・北見恭子・あさみちゆき・服部浩子・中森明菜・門倉有希・西尾夕紀・多岐川舞子・音羽しのぶ・永井みゆき・田川寿美・谷本知美・サエラ・中島ゆきこ・大石まどか・加門亮・池田暉郎・光岡洋・加川明・加山こうじ・渡辺要・クレイジーケンバンド・北岡ひろし・小金沢昇司・鈴木雅之・福山雅治・半田浩二・平井堅・永井龍雲・木原たけし・西方裕之・三浦わたる ジョン・健・ヌッツォ、Lyrico・竹島宏・ジェロ・おおい大輔

・鈴木一平・松田敏来・北川大介・山内恵介・清水翔太・木山裕作・清水博正・逢川まさき・市川たかし・長谷川真吾・岩出和也・柏木タカシ・大江裕・kenjiro・秋岡秀治・山川豊・野上こうじ・黒川真一郎・大地誠・松原健之・三田りょう・秋川雅史・錦織健・宇都宮さだし・三山ひろし・坂井一郎・福田こうへい・細川たかし・山口ひろみ・井上由美子・大沢桃子・池内ゆかり・水田竜子・島津亜矢・市川由紀乃・大黒裕貴・林あさ美・神園さやか・上杉香緒里・山本みゆき・真木ことみ・桜井くみ子・森山愛子・松川美樹・永井裕子・みずき舞・浅田あつこ・椎名佐千子・かつき奈々・南かなこ・山口かおる・小桜舞子・瀬口悠希・花咲ゆき美・金澤美咲・川野夏美・山本智子・前田亘輝・錦織健、飛鳥涼、玉置浩二、鈴木雅之、久保田利伸、尾崎紀世彦、小野正利 MISIA、浜田麻里、superfly、絢香、吉田美和、高橋真梨子、大橋純子、渡辺美里・八神純子、黒猫・デーモン小暮、稲葉浩志、西川貴教、松崎しげる・香田晋・松山千春、山下達郎・石井竜也・KOKIA、YUKI、鈴木聖美、岩崎宏美、夏川りみ・小柳ゆき、マリーン、森川美穂・吉田美奈子・小田和正、河村隆一・ATSUSHI、岡本知高、ISSA、三浦大知・川畑要、堂珍嘉邦、佐藤竹善・つんく・遠藤正明、黒田俊介・郷ひろみ・米良美一・日浦孝則・美輪明宏、新垣勉、桜井賢、山崎まさよし・大黒摩季、鬼束ちひろ、杏里、アンジェラアキ・SAKURA、愛内里菜、平原綾香、柴田淳・鈴木トオル、黒沢薫、村上てつや、岡野昭仁、小椋佳、Gackt・槇原敬之、秦基博、秋川雅史、中孝介、やしきたかじん・谷村新司、吉幾三 角松敏生・椎名林檎、YUKI、広瀬香美・青山テルマ、島谷ひとみ・AI、杏子、松田樹莉亜、加藤ミリヤ、Cocco、伊藤由奈・倅田來未、永井真理子、JUJU・林明日香・さだまさし、小渕健太郎、沢田研二、森山直太郎、影山ヒロノブ・浜田省吾、氷室京介、徳永英明、大橋卓弥、比嘉栄昇、水木一郎・チャゲ・長渕剛・もんたよしのり・宇多田ヒカル、今井美樹、一青窈、本田美奈子、吉岡聖恵・渡辺真知子、水樹奈々・中村あゆみ、矢井田瞳・桑田佳祐、藤原基央、スガシカオ、つのだ☆ひろ・河口恭吾、大友康平・桜井和寿・北川悠仁、西城秀樹・矢沢永吉、奥田民生・藤井フミヤ・尾崎豊・斉藤和義、財津和夫・渋谷すばる・竹内まりや・aiko、西野カナ、葛城ユキ・hitomi・中島美嘉・Sowelu・Bonnie Pink・吉田拓郎、吉川晃司・寺尾聰・つるの剛士・島倉千代子・松山恵子ほか。